富田林市文化財調査報告67

令和元年度

富田林市内遺跡群発掘調査報告書

２０２０．３

富田林市教育委員会

はじめに

富田林市は大阪府の東南部に位置し、市域の中心を流れる石川によって形成された平野部と西部の丘陵部、金剛山系に連なる南部の山地部からなる、自然環境に恵まれた街です。なかでも平野部や丘陵部には古くから人々が営み、多くの遺跡が残っています。

本書は、平成30年から令和元年に実施した緊急発掘調査の成果についてまとめたものです。喜志遺跡、中野北遺跡、樟木谷古墳・小金平古墳群の調査を実施し、貴重な成果を得ることができました。これらの発掘調査で得られた知見が活用され、地域の歴史を考える一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査の実施及び本書の刊行にあたっては、地域住民のみなさまや関係者のみなさまにご理解と多大なご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。今後も本市文化財行政に対するご理解とご支援のほどを、よろしくお願い申し上げます。

令和２年３月

富田林市教育委員会
教育長　　山口　道彦

例　言

１．本書は、令和元年度国庫補助事業「市内遺跡緊急発掘調査事業」の報告書である。

２．本事業は、富田林市教育委員会文化財課が、平成31年４月１日から令和２年３月31日にかけて実施した。

３．令和元年の現地調査および整理作業は、同課職員　河東　潤・角南辰馬・林　正樹、同課非常勤職員　渡邉晴香・西村雅美が担当し、同課非常勤職員　桑本彰子がこれを補佐した。

４．本書の第２章以降の調査成果については、整理作業等の都合から、令和元年12月28日までに現地調査が終了したものを掲載した。また、現地調査は平成30年度に実施したが、整理作業の完了が令和元年度となったものについても、本書に掲載した。

５．本書の執筆は、第１章を渡邉、第２章を林、第３章を西村、第４章を角南が行い、編集は角南が行った。

６．本書に掲載分の現地調査および整理作業には、以下の者の参加を得た（敬称略）。
阿部大誠、大澤　嶺、岡林孝之、貴志正則、谷重祥也、土山賀代、山地美生、吉末和希

７．本報告書で掲載している出土遺物、図面、写真などの資料は、すべて本市教育委員会で保管している。広く活用されることを望むものである。

８．発掘調査にあたっては土地所有者をはじめ、関係者各位のご理解、ご協力を得た。また、樟木谷古墳の現地調査にあたって、白石耕治氏（和泉市いずみの国歴史館）から有益なご教示を得た。感謝の意を表したい。

凡　例

１．本書で使用する標高は、東京湾標準潮位（Ｔ．Ｐ．）を採用している。

２．現地調査における土色の色調は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄1970）を使用した。

３．参考文献は、各章ごとに文末に示した。

目　次

第１章　平成31年・令和元年の調査状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２章　喜志遺跡（ＫＳ２０１８－１）の調査
　第１節　調査の経緯と既往の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　第２節　調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　第３節　まとめ・・・8
第３章　中野北遺跡（ＮＮＮ２０１８－１）の調査
　第１節　調査の経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　第２節　調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　第３節　まとめ・・11
第４章　樟木谷古墳・小金平古墳群（ＫＧＨ２０１９－１）の調査
　第１節　調査の経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
　第２節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　第３節　確認した遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
　第４節　古墳の復元・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
報告書抄録

挿　図　目　次

図１　市内遺跡分布図（Ｓ＝1/40,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
図２　調査地と弥生時代中期集落（Ｓ＝1/10,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
図３　調査地と小字「高塚」（Ｓ＝1/10,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
図４　調査区平面図（Ｓ＝1/150）および南壁断面図（Ｓ＝1/50・1/150）・・・・・・・・・・6
図５　南辺葺石状の礫群平面図・エレベーション（Ｓ＝1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・7
図６　北辺葺石状の礫群平面図・南壁エレベーション（Ｓ＝1/30）・・・・・・・・・・・・・・7
図７　調査位置図（Ｓ＝1/10,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
図８　トレンチ配置図（Ｓ＝1/600）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
図９　トレンチ平面図（Ｓ＝1/150）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
図10　土層柱状図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
図11　出土遺物（Ｓ＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
図12　調査位置図（Ｓ＝1/3,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
図13　樟木谷古墳現況測量図（Ｓ＝1/200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
図14　樟木谷古墳完掘後測量図（Ｓ＝1/200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
図15　墳丘南裾部土層断面図（Ｓ＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
図16　墳丘土層断面図（Ｓ＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
図17　出土遺物（Ｓ＝1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

図18　落ち込み平面図（Ｓ＝1/100）・断面図（Ｓ＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
図19　立柱遺構平・断面図（Ｓ＝1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
図20　宮林古墳の墳丘（Ｓ＝1/300）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
図21　小金平古墳（墳丘：Ｓ＝1/200、須恵器：Ｓ＝1/4、鉄釘：Ｓ＝1/2、石室：Ｓ＝1/40）・・・・・25
図22　樟木谷古墳復元案（Ｓ＝1/300）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

表　目　次

表１　発掘届（通知）受理件数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
表２　発掘調査一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
表３　試掘調査一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

写　真　目　次

写真１　令和元年度調査地近景　樟木谷古墳（西から、2014年10月撮影）・・・・・・・・・・3
写真２　令和元年度調査地近景　樟木谷古墳（北東から、2014年10月撮影）・・・・・・・・・3
写真３　墳丘南部の除草作業風景（南西から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
写真４　除草作業後の墳丘崖面（南から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
写真５　小金平古墳群遠景（東から、1987年撮影）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

図　版　目　次

図版１　喜志遺跡（ＫＳ２０１８－１）
　調査区西辺 溝状遺構（南から）　南辺葺石状の礫群（西から）　北辺葺石状の礫群（北西から）
図版２　中野北遺跡（ＮＮＮ２０１８－１）
　西側トレンチ全景（南から）　北側トレンチ全景（西から）　東側トレンチ全景（北から）
　南側トレンチ全景（東から）
図版３　樟木谷古墳・小金平古墳群（ＫＧＨ２０１９－１）
　小金平古墳群遠景（南から、1983年撮影）　樟木谷古墳（中央上）および宮林古墳（中央）遠景（東から、1983年撮影）　樟木谷古墳（左上）および宮林古墳（中央）遠景（南東から、1983年撮影）
図版４　樟木谷古墳・小金平古墳群（ＫＧＨ２０１９－１）
　調査地遠景（西から）　調査地遠景（北から）　調査地遠景（北から）
図版５　樟木谷古墳・小金平古墳群（ＫＧＨ２０１９－１）
　墳丘南西部（南西から）　墳丘南部（南から）　墳丘南部（南から）
図版６　樟木谷古墳・小金平古墳群（ＫＧＨ２０１９－１）
　墳丘北部（北から）　墳丘北部（西から）　墳丘北東部（南東から）
図版７　樟木谷古墳・小金平古墳群（ＫＧＨ２０１９－１）
　落ち込み（西から）　立柱遺構（東から）　立柱遺構（南から）

第１章　平成31年・令和元年の調査状況

平成 31 年 1 月から令和元年 12 月の間において、文化財保護法第 93 条・94 条に基づく発掘届・発掘通知の総数は 169 件であり、昨年の総数 155 件より若干多くなっている（表１）。そのうち、民間の開発に伴った発掘届出の件数は 141 件となっており、昨年の 143 件とほぼ変わらない状況である。事前・立会調査といった調査対応についても、ほぼ件数は変わらない。

一方で、１件あたりの面積が広い調査は昨年よりも多く、100 ㎡を超える発掘調査が７件（昨年は５件）、さらにその中でも 500 ㎡を超える調査は３件（昨年は１件）となり、一年間の調査総面積は 4,000 ㎡を超える。これは前年のおよそ倍の面積となっている。特に７月から 11 月にかけては、最大で４件以上の本調査を並行して実施するという異例の事態となった。

これらの広い面積の調査は宅地造成工事に伴うものが大半であり、その中の一つに遺跡範囲を拡大した調査がある。甲田六丁目における宅地造成工事は、申請地の東半分が甲田遺跡、西半分が遺跡外となっていたが、本調査（表２−17）の結果により遺跡範囲を申請地全域に拡大した。

公共工事としては、畑ヶ田遺跡にて本調査（表２−22）を実施した。これは若松町における市営住宅建て替え事業の一環で、今回は幹線道路の新設に伴う調査である。これまでの同事業で実施してきた調査と同様、竪穴建物や掘立柱建物などがみつかっている。

埋蔵文化財包蔵地外である若松町四丁目の試掘調査（表３−８）では、遺跡が新たに発見され、弥生時代から中世までの複合遺跡として新堂東遺跡と命名した。引き続き行った本調査（表２−23）では、多数のピットや土坑などを確認している。

国庫補助事業として発掘調査を実施したのは、昨年度の同事業で事前調査を行った樟木谷古墳・小金平古墳群（表２−15、第４章掲載）の本調査である。本書ではその調査と、昨年度に本調査を実施し、今年度に整理作業が完了した喜志遺跡（第２章掲載）と中野北遺跡（表２−６、第３章掲載）の調査の計３件を報告する。

表１　発掘届（通知）受理件数

	発掘届出(93条)						発掘通知(94条)						合計
	事前	立会	慎重	遺憾	進達	小計	事前	立会	慎重	遺憾	進達	小計	
道路	0	0	0	0	0	0	1	0	14	0	0	15	15
宅地造成	4	1	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	5
個人住宅	4	25	8	0	0	37	0	0	0	0	0	0	37
分譲住宅	1	8	12	0	0	21	0	0	0	0	0	0	21
共同住宅	3	1	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	4
兼用住宅	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
店舗	2	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	3
工場	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
その他建物	5	2	0	0	0	7	0	0	1	0	0	1	8
学校	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
公園造成	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ガス	0	0	32	0	0	32	0	0	0	0	0	0	32
電気	0	0	26	0	0	26	0	0	0	0	0	0	26
水道	0	0	0	0	0	0	0	1	7	0	0	8	8
下水道	0	0	1	0	0	1	0	1	1	0	0	2	3
電話通信	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他開発	1	0	2	0	0	3	0	0	2	0	0	2	5
小計	22	38	81	0	0	141	1	2	25	0	0	28	169

表２　発掘調査一覧

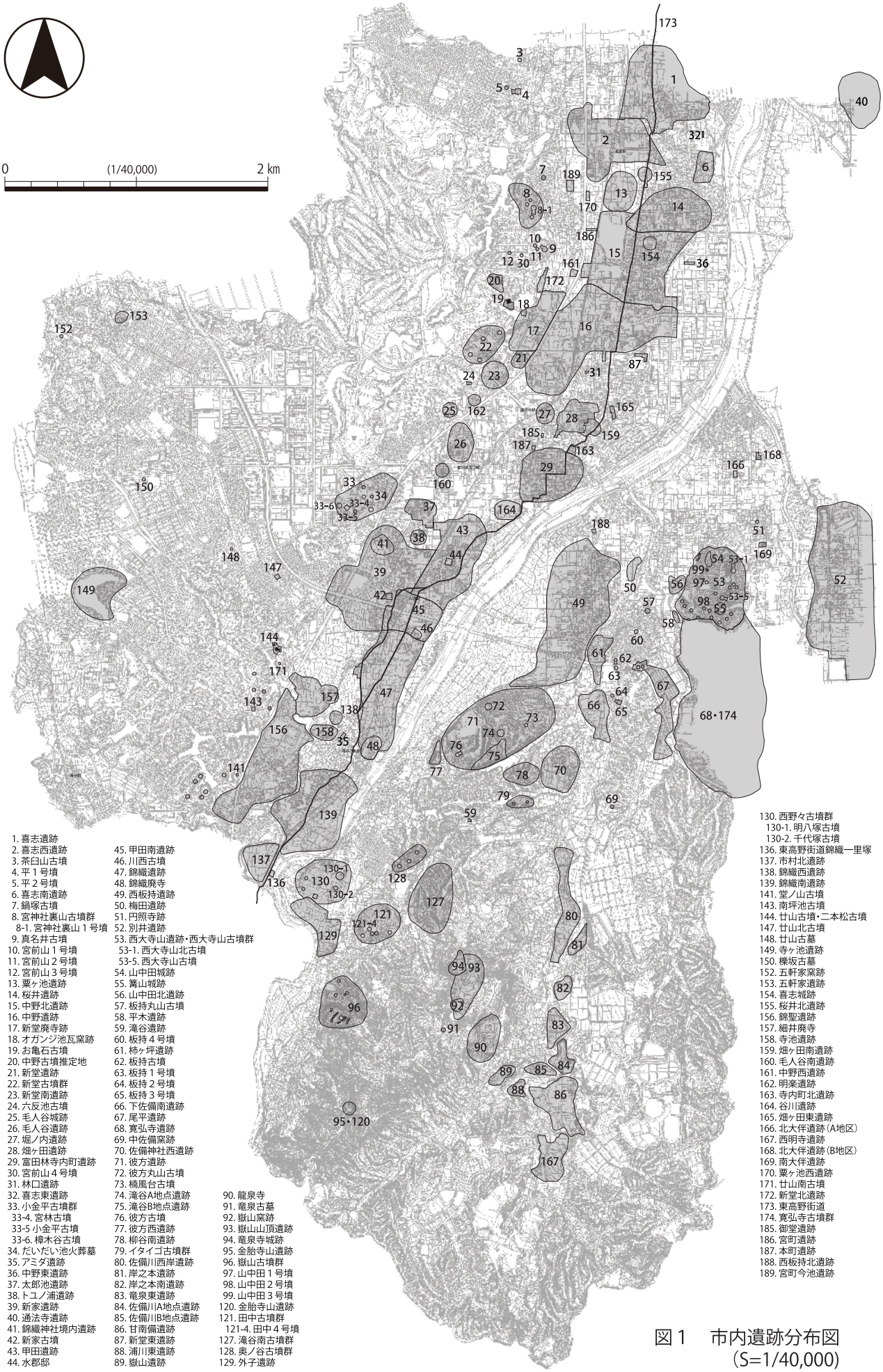
番号	調査日	所在地	遺跡名	調査原因	調査面積（㎡）	調査結果	担当者	備考
1	H30/10/22～1/16	喜志町一丁目	喜志南遺跡	宅地造成	939	ピット、土坑ほか	西村	KSS2018-1（H30に事前調査実施分の本調査）
2	1/30	甲田二丁目	甲田遺跡	個人住宅	2.1	遺構・遺物無	渡邉	
3	2/13	錦織東三丁目	錦織南遺跡	その他建物	1.4	遺構無、遺物有	渡邉	
4	2/21	錦織東三丁目	錦織南遺跡	個人住宅	9.0	遺構・遺物有	林	
5	3/1	喜志町四丁目	喜志遺跡	個人住宅	70.4（常時立会）	遺構・遺物有	渡邉	
6	3/14～3/20	中野町二丁目	中野北遺跡	その他建物	33.3	本書掲載	西村	NNN2018-1（国庫補助）
7	3/15	喜志町一丁目	喜志南遺跡	共同住宅	2.7	遺構・遺物有	林	遺構面保護のうえ施工
8	3/20	桜井町一丁目	桜井遺跡	宅地造成	19.3	遺構・遺物有	林	SI2019-1（11の事前調査）
9	4/3	西板持町九丁目	梅田遺跡	駐車場	2.9	遺構・遺物無	渡邉	
10	4/8	錦織東二丁目	錦織遺跡	その他建物	2.1	遺構無、遺物有	渡邉	
11	4/11～4/26	桜井町一丁目	桜井遺跡	宅地造成	107.7	ピットほか	西村	SI2019-1（8の本調査）
12	4/22	旭ヶ丘町	喜志西遺跡	共同住宅	8.0	耕作痕跡、遺物無	林	
13	5/20	甲田六丁目	甲田遺跡	宅地造成	28.5	遺構・遺物有	渡邉	KD2019-1（17の事前調査）
14	5/27	錦織東一丁目	錦織遺跡	店舗	3.2	遺構・遺物有	林	NK2019-1（16の事前調査）
15	5/30～8/29	美山台	樟木谷古墳・小金平古墳群	個人住宅	460	本書掲載	角南	KGH2019-1（国庫補助）
16	6/20～6/25	錦織東一丁目	錦織遺跡	店舗	9.0	落ち込み	林	NK2019-1（14の本調査）
17	7/2～ 9/20	甲田六丁目	甲田遺跡	宅地造成	1,027	ピット、溝ほか	西村	KD2019-1（13の本調査）
18	7/5	若松町五丁目	中野遺跡	宅地造成	4.7	遺構・遺物有	渡邉	NN2019-1（21の事前調査）
19	7/9	若松町一丁目	畑ヶ田遺跡	店舗	12.8	遺構・遺物無	渡邉	
20	7/24	錦織東三丁目	錦織南遺跡	工場	1.5	遺構・遺物無	林	
21	7/29～11/15	若松町五丁目	中野遺跡	宅地造成	882.3	ピット、溝ほか	林	NN2019-1（18の本調査）
22	9/2～R2/1/30	若松町一丁目	畑ヶ田遺跡	道路	766	ポット、竪穴建物ほか	渡邉	HD2019-1
23	9/17～11/22	若松町四丁目	新堂東遺跡	宅地造成	497.1	ピット、土坑ほか	西村	SDE2019-1（試掘8の本調査）
24	10/8	若松町四丁目	中野遺跡	その他建物	13.7	遺構無、遺物有	角南	遺構面保護のうえ施工
25	10/9	中野町一丁目	中野北遺跡	共同住宅	3.2	遺構無、遺物有	角南	遺構面保護のうえ施工

表３　発掘調査一覧

番号	調査日	所在地	調査原因	調査面積（㎡）	調査結果	担当者	備　考
1	1/7	平町一丁目	分譲住宅	0.9	遺構・遺物無	林	
2	2/5	桜井町一丁目	共同住宅	―	遺構・遺物無	渡邉	
3	3/26	加太二丁目	宅地造成	10	遺構・遺物無	林	
4	4/5	喜志新家町一丁目	店舗	工事立会	遺構・遺物無	渡邉	
5	4/8	川向町	その他建物	工事立会	遺構・遺物無	渡邉	
6	6/13	伏見堂	その他建物	工事立会	遺構・遺物無	林	
7	7/8	大字喜志	宅地造成	0.9	遺構・遺物無	林	
8	7/16	若松町四丁目	宅地造成	11.4	遺構・遺物有	渡邉	新規発見「新堂東遺跡」（発掘23の試掘調査）
9	8/1	本町	その他建物	1.4	遺構・遺物無	渡邉	
10	8/5	喜志町二丁目	共同住宅	工事立会	遺構・遺物無	西村	
11	8/20	大字廿山	その他建物	6.0	遺構・遺物無	渡邉	
12	11/7	須賀三丁目	共同住宅	0.5	遺構・遺物無	角南	

写真１　令和元年度調査地近景
樟木谷古墳
（西から、2014年10月撮影）

写真２　令和元年度調査地近景
樟木谷古墳
（北東から、2014年10月撮影）



1. 喜志遺跡
2. 喜志西遺跡
3. 茶臼山古墳
4. 平１号墳
5. 平２号墳
6. 喜志南遺跡
7. 鍋塚古墳
8. 宮神社裏山古墳群
8-1. 宮神社裏山１号墳
9. 真名井古墳
10. 宮前山１号墳
11. 宮前山２号墳
12. 宮前山３号墳
13. 粟ヶ池遺跡
14. 桜井遺跡
15. 中野北遺跡
16. 中野遺跡
17. 新堂廃寺跡
18. オガンシ池瓦窯跡
19. お亀石古墳
20. 中野古墳推定地
21. 新堂遺跡
22. 新堂古墳群
23. 新堂南遺跡
24. 六反池古墳
25. 毛人谷城跡
26. 毛人谷遺跡
27. 堀ノ内遺跡
28. 畑ヶ田遺跡
29. 富田林寺内町遺跡
30. 宮前山４号墳
31. 林口遺跡
32. 喜志東遺跡
33. 小金平古墳群
33-4. 宮林古墳
33-5 小金平古墳
33-6. 樟木谷古墳
34. だいだい池火葬墓
35. アミダ遺跡
36. 中野東遺跡
37. 太郎池遺跡
38. トユノ浦遺跡
39. 新家遺跡
40. 通法寺遺跡
41. 錦織神社境内遺跡
42. 新家古墳
43. 甲田遺跡
44. 水郡邸
45. 甲田南遺跡
46. 川西古墳
47. 錦織遺跡
48. 錦織廃寺
49. 西板持遺跡
50. 梅田遺跡
51. 円照寺跡
52. 別井遺跡
53. 西大寺山遺跡・西大寺山古墳群
53-1. 西大寺山北古墳
53-5. 西大寺山古墳
54. 山中田城跡
55. 篝山城跡
56. 山中田北遺跡
57. 板持丸山古墳
58. 平木遺跡
59. 滝谷遺跡
60. 板持４号墳
61. 柿ヶ坪遺跡
62. 板持古墳
63. 板持１号墳
64. 板持２号墳
65. 板持３号墳
66. 下佐備南遺跡
67. 尾平遺跡
68. 寛弘寺遺跡
69. 中佐備窯跡
70. 佐備神社西遺跡
71. 彼方遺跡
72. 彼方丸山古墳
73. 楠風台古墳
74. 滝谷A地点遺跡
75. 滝谷B地点遺跡
76. 彼方古墳
77. 彼方西遺跡
78. 柳谷南遺跡
79. イタイゴ古墳群
80. 佐備川西岸遺跡
81. 岸之本遺跡
82. 岸之本南遺跡
83. 竜泉東遺跡
84. 佐備川A地点遺跡
85. 佐備川B地点遺跡
86. 甘南備遺跡
87. 新堂東遺跡
88. 浦川東遺跡
89. 嶽山遺跡
90. 龍泉寺
91. 竜泉古墓
92. 嶽山窯跡
93. 嶽山山頂遺跡
94. 竜泉寺城跡
95. 金胎寺山遺跡
96. 嶽山古墳群
97. 山中田１号墳
98. 山中田２号墳
99. 山中田３号墳
120. 金胎寺山遺跡
121. 田中古墳群
121-4. 田中４号墳
127. 滝谷南古墳群
128. 奥ノ谷古墳群
129. 外子遺跡
130. 西野々古墳群
130-1. 明八塚古墳
130-2. 千代塚古墳
136. 東高野街道錦織一里塚
137. 市村北遺跡
138. 錦織西遺跡
139. 錦織南遺跡
141. 堂ノ山古墳
143. 南坪池古墳
144. 廿山古墳・二本松古墳
147. 廿山北古墳
148. 廿山古墓
149. 寺ヶ池遺跡
150. 樑坂古墓
152. 五軒家窯跡
153. 五軒家遺跡
154. 喜志城跡
155. 桜井北遺跡
156. 錦聖遺跡
157. 細井廃寺
158. 寺池遺跡
159. 畑ヶ田南遺跡
160. 毛人谷南遺跡
161. 中野西遺跡
162. 明楽遺跡
163. 寺内町北遺跡
164. 谷川遺跡
165. 畑ヶ田東遺跡
166. 北大伴遺跡（A地区）
167. 西明寺遺跡
168. 北大伴遺跡（B地区）
169. 南大伴遺跡
170. 粟ヶ池西遺跡
171. 廿山南古墳
172. 新堂北遺跡
173. 東高野街道
174. 寛弘寺古墳群
185. 御堂遺跡
186. 宮町遺跡
187. 本町遺跡
188. 西板持北遺跡
189. 宮町今池遺跡

図１　市内遺跡分布図
（S=1/40,000）

第２章　喜志遺跡（ＫＳ２０１８－１）の調査

第１節　調査の経緯と既往調査

今回報告するのは、個人住宅の建設に伴う発掘調査である。事前調査の結果、弥生土器やサヌカイトなどの遺物と、遺構の可能性がある落ち込みが検出されたため、平成 30 年 10 月 15 日から同月 24 日まで実働９日間で本調査を実施した。

調査対象箇所は、東辺を除く調査地を囲む擁壁である。住宅建物本体は道路面まで 1m 強の盛土がなされるため、建物基礎の掘削による影響はないと判断した。道路に面した東辺の擁壁については、既存水路の構築に際して遺構面が破壊されていると判断し、調査対象から除外した。

喜志遺跡は、富田林市・羽曳野市の市域をまたぎ、石川西岸の河岸段丘面上に立地する（図２）。旧石器時代から中世にかけての複合遺跡であるが、特に弥生時代中期における石器製作を主業とした集落跡として名高い。喜志遺跡の南西には喜志西遺跡が存在する。両遺跡のうち、国道旧 170 号と近鉄長野線に挟まれた一帯には、段丘面を南北方向に浅く広く開いた谷状地形が存在しており、周辺より漸次的に標高が低くなっている。谷状地形の中央部には埋没した自然河道があり、その西側で方形周溝墓群が見つかっている。これらの方形周溝墓は喜志遺跡の弥生時代中期集落の墓域であったと考えられている（大阪府教育委員会 1994）。

また、調査地の東側一帯には、「高塚」という古墳の存在を示唆するような小字名が残る（図２）。喜志遺跡・喜志西遺跡で古墳は見つかっていないものの、両遺跡内の各地で５世紀後半から６世紀前半にかけての埴輪が一定量出土しており、複数基の埋没古墳の存在が推測されていた（富田林市教育委員会 1995）。

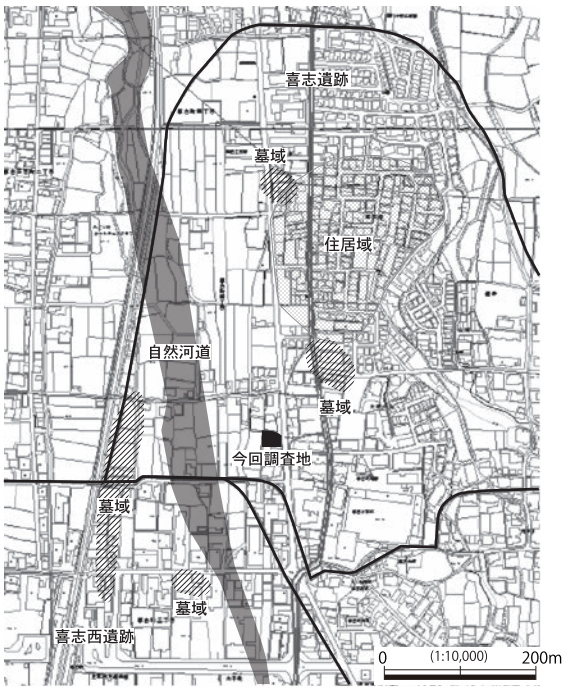


図２　調査地と弥生時代中期集落（Ｓ＝1/10,000）
（大阪府教育委員会1994をもとに作成）

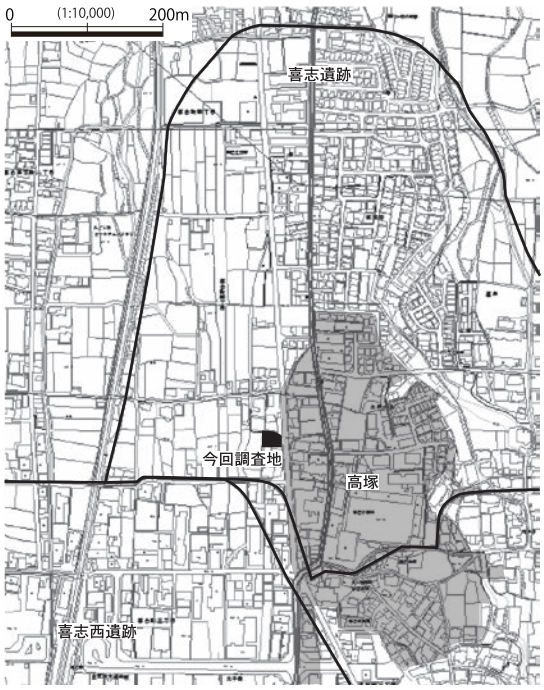
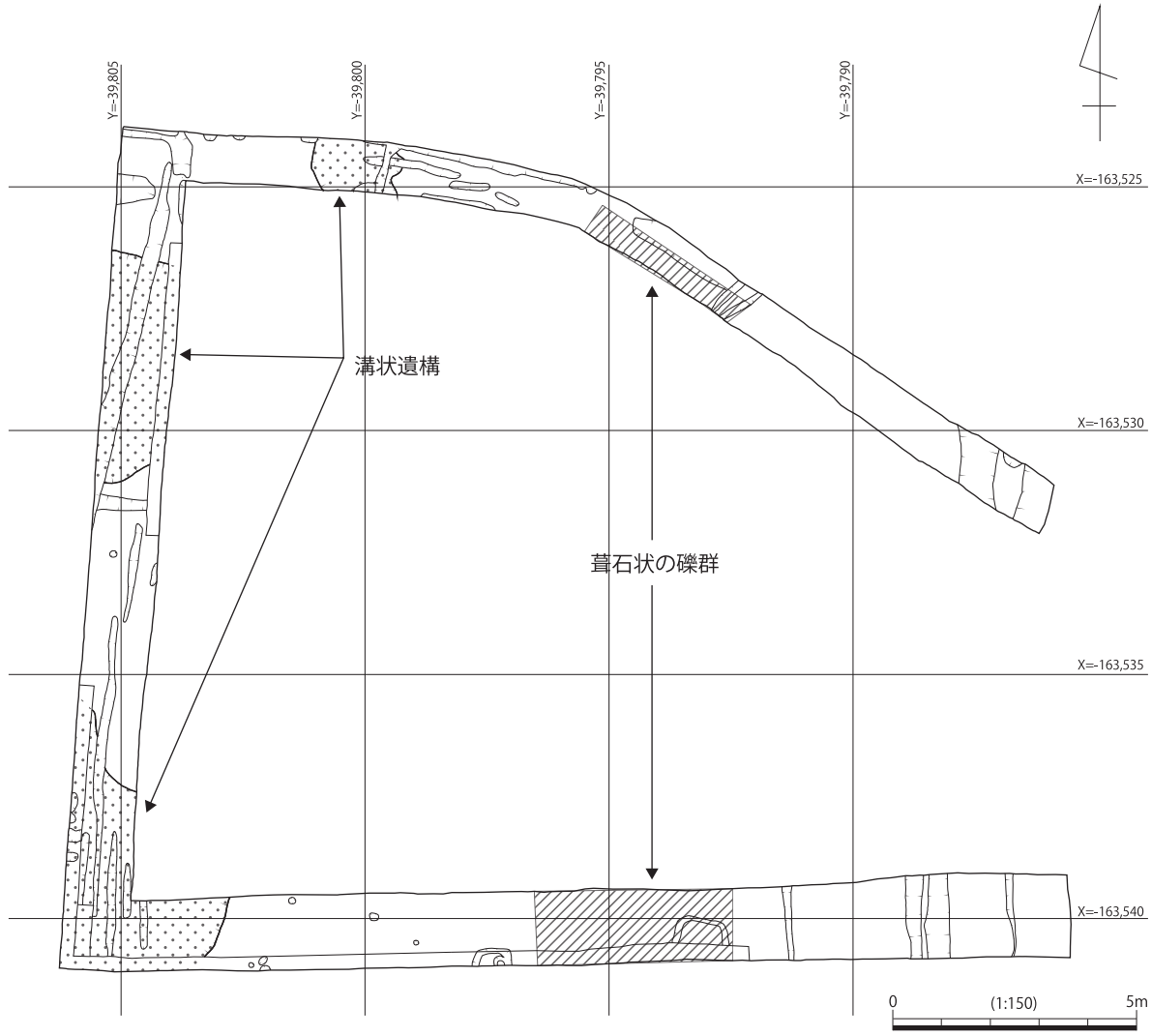
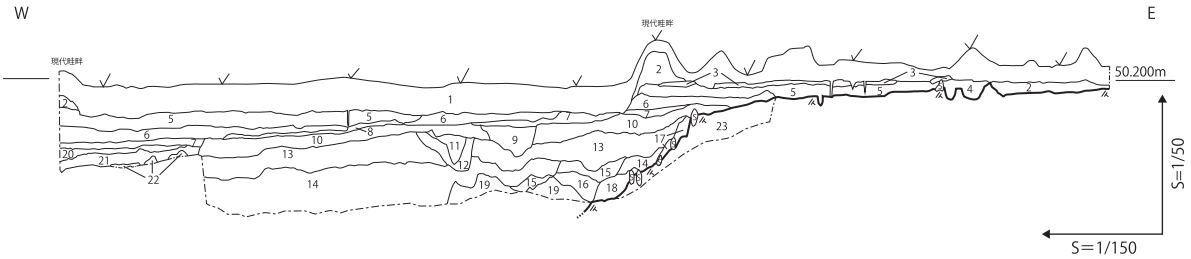


図３　調査地と小字「高塚」（Ｓ＝1/10,000）
（富田林市教育委員会1995をもとに作成）





1．現耕作土
2．旧耕作土
3．床土
4．2.5Y6/1 黄灰色粘質土（Fe が入る）
5．5Y6/1 灰色粘質土（Mg 斑が入る）
6．2.5Y7/3 浅黄色粘質土
7．2.5Y7/2 灰黄色砂質土（上面に Mg が沈着）
8．10YR8/6 浅橙色粘質土
9．2.5Y7/2 灰黄色粘質土
10．5Y8/3 淡黄色粘質土
11．2.5Y8/4 淡黄色粘質土
12．2.5Y8/4 淡黄色粘質土（Mg 斑が多く入る）
13．2.5Y8/4 淡黄色粘質土（Mg 斑が入る）
14．5Y8/2 灰白色粘質土
15．2.5Y8/3 淡黄色シルト
16．2.5Y8/3 淡黄色砂質土
17．2.5Y7/3 浅黄色シルト（径 15cm の礫が入る）
18．2.5Y8/1 灰白色粘土（砂岩の小礫が入る）
19．5Y8/3 浅黄色礫混中砂（Fe 斑が入る）
20．10YR3/1 黒褐色粘質土
21．2.5Y5/1 黄灰色粘土
22．5Y8/3 淡黄色砂質土
23．2.5Y6/3 にぶい黄色砂礫【地山】

図４　調査区平面図（Ｓ＝1/150）および南壁断面図（Ｓ＝1/50・1/150）

第２節　調査の成果

調査区は擁壁予定地に倣って、幅 1.5m～1.0mの逆コの字形である（図４）。中央の現代畦畔以東が畑作地であり、以西が水田地であった。畦畔以東の層序は、現代耕作土層→中世耕作土層→地山の順であり、ほぼ平坦な地山面上で中世から近現代にかけての耕作溝や水路跡が検出された。地山は畦畔付近から西へ下傾しており、地山傾斜面で葺石状の礫群を検出したため、南辺（図５）・北辺（図６）ともに礫群の下部まで重機および人力で掘削を行った。畦畔以西については、礫群を除き包含層（図４　南壁壁面図７層）下面を遺構面として検出を行った。畦畔以西の遺構としては、耕作溝、溝状遺構、ピットがある。耕作溝は近世以降のものである。ピットは埋土中に遺物が確認できなかったため、時期を判断できない。今回調査のうち、葺石状の礫群と溝状遺構について、特筆すべきものとして以下に別記する。

葺石状の礫群（図５・図６）　南辺では東西 2.4mの幅で礫群が検出された。礫群の上端と下端では 0.55mの比高がある。上端から傾斜変換点（西に 1.4m）までが勾配約 18 度であり、傾斜変

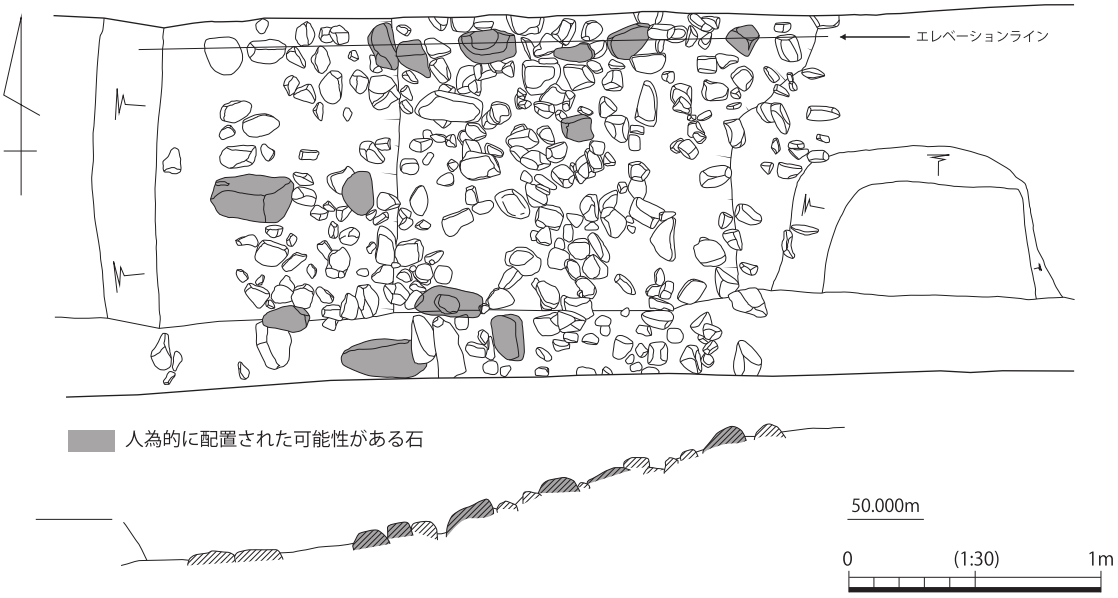


図５　南辺葺石状の礫群平面図・エレベーション（Ｓ＝1/30）

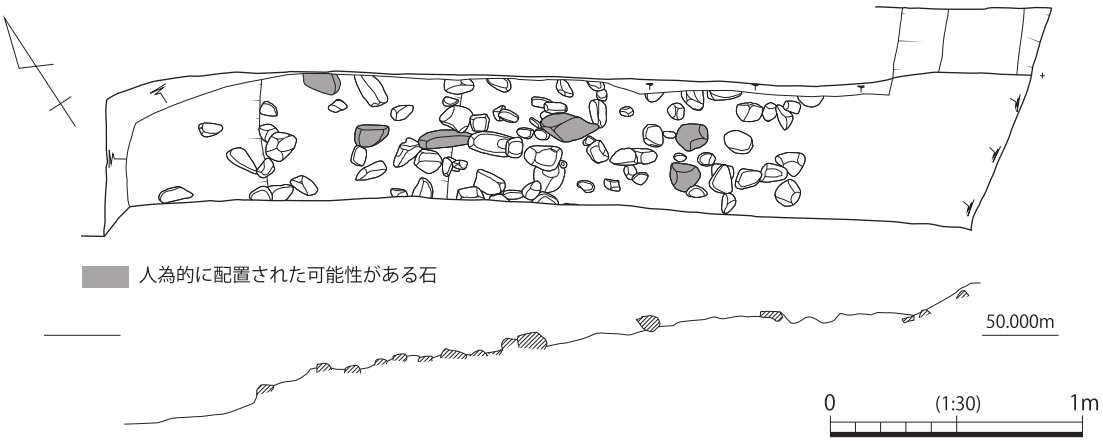


図６　北辺葺石状の礫群平面図・南壁エレベーション（Ｓ＝1/30）

換点以西は勾配約６度と緩やかになる。傾斜面は地山内に比べて礫の密度が高い。形状は亜角礫がほとんどであり、地山内の礫とほぼ同質である。サイズは径 10cm 前後が多いが、傾斜変換点付近では長さ 30cm 程度のものもある。礫群の覆土から遺物は出土していない。

北辺では東西 2.5mの幅で礫群が検出された。調査区が 30 度南に振れていることを考えれば、水平距離は約 2.2mとなる。礫群の上端と下端では 0.45mの比高がある。上端から傾斜変換点（西に 2.0m、水平距離では 1.7m）までが勾配約８度であり、その先の 0.4mで比高 0.2m勾配約 30 度と急に落ちたのち、再び勾配約８度と緩やかになる。南辺に比べると、礫の密度はややまばらである。礫群の覆土から遺物は出土していない。

なお、南辺・北辺間の中間点２点にトレンチを設定したところ、礫群の上端はほぼ直線状に続いていることが確認できた。両辺間の距離は上端で約 13m、下端で約 15mである。

溝状遺構（図４）　計３箇所で検出した。前述の礫群上に堆積した土層を遺構面とする。いずれも完掘は行っておらず、サブトレンチを設定して、堆積状況の確認を行うにとどめた。遺物は包含層（南壁断面図７層）及び黒褐色粘質土層（同 20 層）から出土しており、弥生時代中期に属する弥生土器片とサヌカイト剥片である。黒褐色粘質土層は最大で 15cm ほどの厚みである。その直下にある黄灰色粘土層（同 21 層）からは、遺物が出土していない。

第３節　まとめ

調査地付近における今後の調査方針を方向づける２点の成果が得られた。

１点目は地山傾斜面・葺石状の礫群である。葺石を備える古墳の墳丘裾部とすれば、古墳時代中期に属すると思われる。周辺の埴輪出土状況や小字名の状況、また甲田地区では古墳時代中期に段丘面で古墳が築造されていることを考慮すると、古墳の可能性はあり得る。

２点目は溝状遺構である。西辺中央の溝に挟まれた部分を墳丘だとすれば、一辺 6mほどの方形周溝墓の可能性がある。ただし、溝埋土から出土した弥生土器はいずれも破片であり、方形周溝墓に伴う供献土器であったとは判断できない。

両者から想定される年代観と、層序の関係は逆転している。一方の時代・性格が確定すると、もう一方は遺構の形成過程について別の要因を考えなければならないだろう。今回は調査期間・範囲が限られており、その判断を行うには材料が不足している。いずれにしても、調査地付近には方形周溝墓か古墳の存在が想定され、喜志地域の墓制を考える上で重要な遺構が埋蔵されている可能性が高いと考える。

参考文献

大阪府教育委員会1994『喜志西遺跡発掘調査概報』Ⅲ

富田林市教育委員会1995『平成６年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書』（『富田林市埋蔵文化財調査報告』26）

第３章　中野北遺跡（ＮＮＮ２０１８－１）の調査

第１節　調査の経緯と経過

調査地は中野町二丁目地内に位置し、石川の中位段丘の東縁部にあたり、西側の谷と東側の段丘崖との間で舌状に張り出した部分に立地する。申請地は旧石器から中世までの遺跡である中野北遺跡の範囲内にあり、その舌状地形と小字名から楠木正成築城の「中野古城」の推定地ともいわれるが、詳細は分かっていない（図７）。

今回の調査は、真宗大谷派正受寺の庫裏新築工事に伴う発掘調査である。平成 26 年に実施した本堂建て替えに伴う調査（NNN2014-1）の北側に隣接する（図８）。本堂部分の調査では、多くの中世から近世の遺構・遺物を確認した（富田林市教育委員会 2017）。正受寺の創建については宝暦６（1756）年、明和２（1765）年、明和年間（1764～1772 年）の諸説があり、明治中期に台風で倒壊し、再建された記録がある。

現地調査は平成 31 年３月 14 日から 20 日まで行い、庫裏建物の基礎外周部分に約 0.7m幅のトレンチを設定した。実働は４日間で、調査面積は 33.3 ㎡である。

第２節　調査の成果

基礎の深さのＧＬ－34 ㎝まで掘削したが、近代以降の盛土内に収まったため、60 ㎝角の範囲で下層確認を８か所実施した（坪①～⑧）。基本層序は盛土直下が地山で、成果は以下のとおりである。

坪①　ＧＬ－40 ㎝で地山及び近世以降のピット（ＳＰ１）を検出した。直径 40 ㎝以上、深さ 15 ㎝を測る。江戸後期以降の三巴文軒丸瓦と丸瓦（図 11-12、11）が出土した。

坪②　ＧＬ－40 ㎝で地山を確認したが、西南端は盛土内に収まる。

坪③・④　ＧＬ－45～50 ㎝で地山と現代の攪乱を検出した。

坪⑤　東側トレンチ南半の土坑（ＳＫ２）内か。ＧＬ－50 ㎝で地山と明治中期の遺物を確認。

坪⑥　掘削限度のＧＬ－60 ㎝まで掘削したが、盛土内に収まった。

図７　調査位置図（Ｓ＝1/10,000）

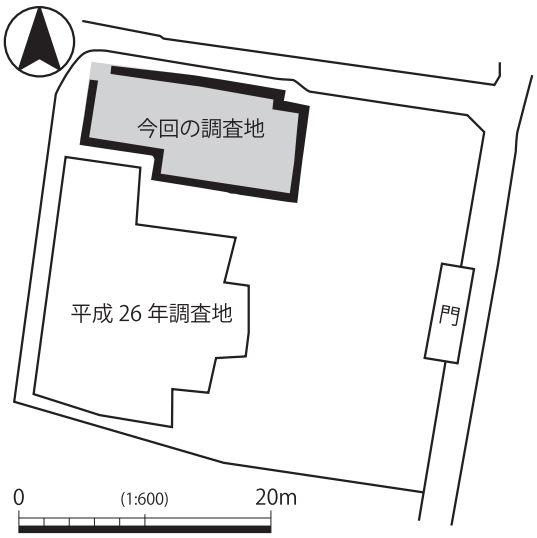


図８　トレンチ配置図（Ｓ＝1/600）

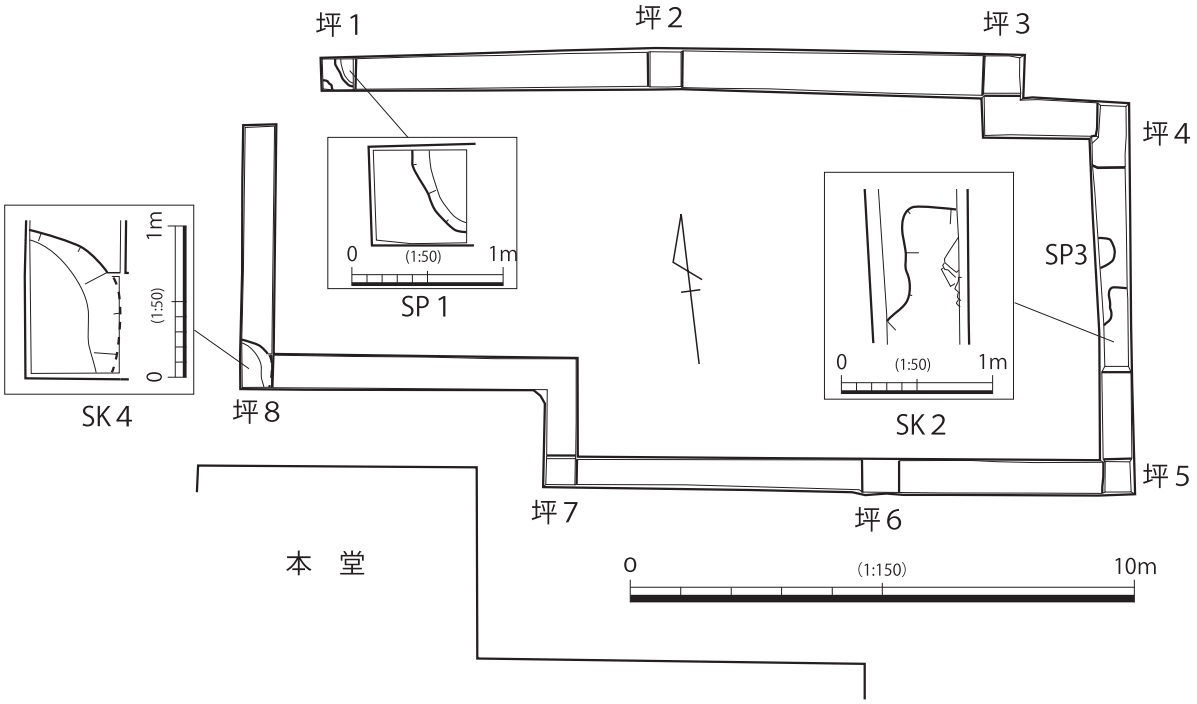
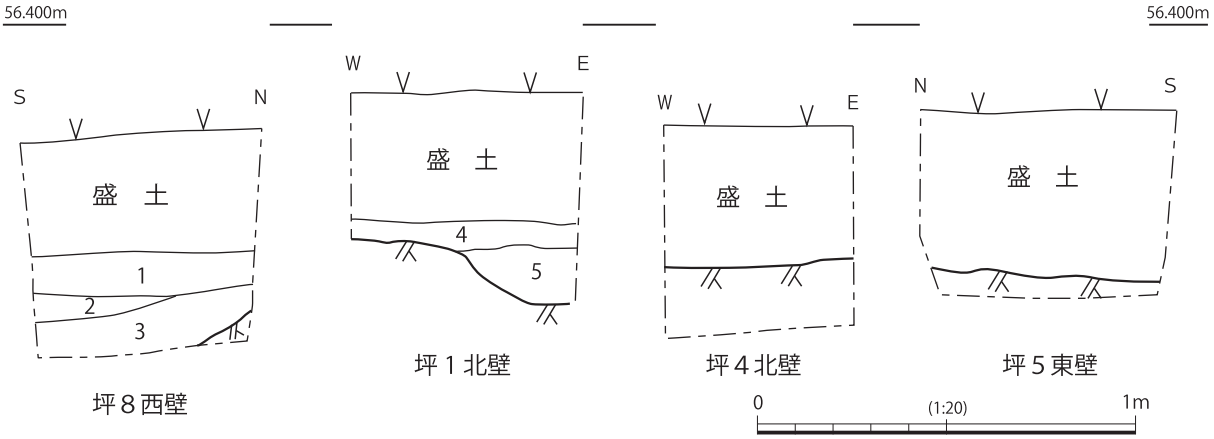


図９　トレンチ平面図（Ｓ＝1/150）



1. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土【SK4 埋土】
2. 10YR4/1 褐灰色砂礫混じり粘質土【SK4 埋土】
3. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土（瓦片・土師器片含む）【SK4 埋土】
4. 10YR6/8 明黄褐色粘質シルト～粘土に 2.5Y5/3 黄褐色微細砂ブロックと同粘質シルトブロック混入
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土【SP1 埋土】

図10　土層柱状図

坪⑦　ＧＬ－55 ㎝で地山を確認した。

坪⑧　土坑（ＳＫ４）の肩部分を検出した。平成 26 年調査のＳＫ４の北端と思われる。ＧＬ－60 ㎝まで掘削したが、西南端では遺構の底は確認できなかった。中世の土師器細片が出土した。

出土遺物　陶磁器・瓦質土器・瓦器・中世須恵器・土師器・瓦・硯で、盛土内で出土した近世以降のものが主である。１は近世陶器の堺産すり鉢で 18 世紀のもの。２・３は唐津焼碗で時期は 17 世紀初頭である。４～７は肥前磁器染付で 18 世紀の所産。８・９は型紙刷の磁器染付で 19 世紀のもの。10 は凝灰岩製の石製硯で、表裏に使用痕がある。側面三面には「松山正秀」の刻書

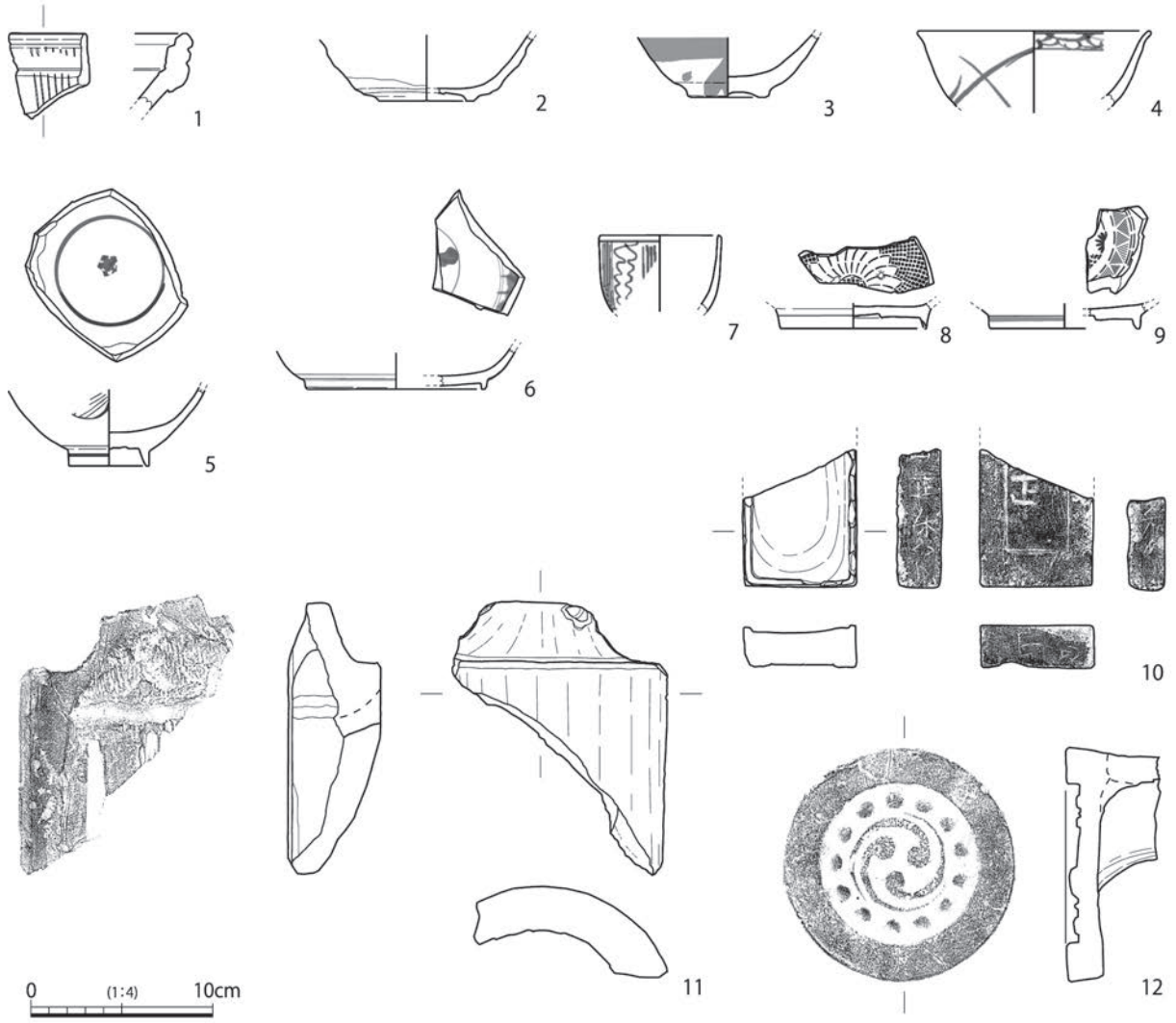


図11　出土遺物（S＝1/4）

がある。石製硯は平成26年調査で虎間硯を確認しているが、この硯はそれとは材質が異なる。盛土から出土した。なお、図化できない小破片だが、15世紀末～16世紀の黄瀬戸の鉢、16世紀の土師質土器すり鉢、17世紀の湊焼の甕、丹波焼すり鉢、19世紀のコンロと思われる瓦質土器片も見られた。このほか持ち帰らなかったが大量の18～19世紀の瓦も出土している。

第3節　まとめ

今回の調査は盛土内に収まるものの、15 世紀末から明治中期に至る遺物が出土した。西側トレンチと南側トレンチの西半では近世以降の遺物とともに、僅かではあるが中世の遺物も確認した。全体的に平成 26 年調査の結果と同様の傾向にある。盛土は遺物の下限から明治中期の台風による倒壊後のもので、正受寺の文献資料を後押しする資料であるといえる。

参考文献

富田林市教育委員会2017『中野北遺跡』（『富田林市文化財調査報告』60）

第４章　樟木谷古墳・小金平古墳群（ＫＧＨ２０１９－１）の調査

第１節　調査の経緯と経過

樟木谷古墳は美山台に所在し、立地的には石川西岸の羽曳野丘陵上に位置する。古墳のすぐ東側の丘陵縁辺には、古墳時代前期の宮林古墳が存在したほか（富田林市教育委員会 1984・1985）、さらにその東側の丘陵斜面上では、古墳時代後期から終末期にかけての小金平古墳を発掘調査で確認しており（富田林市教育委員会 1987）、これらを小金平古墳群と総称している（図 12）。樟木谷古墳は、平成 26 年の現地踏査で古墳である蓋然性が高いと判断し、古墳群内で唯一現存する古墳として、新たに遺跡登録を行った。

遺跡登録時には、すでに宅地に接する東側と道路沿いが崖状を呈しており、墳形も不明な状態であったが、周辺一帯の宅地化が進むなかで開発を免れてきた。しかし、平成 30 年４月に土地所有者より個人住宅の建築計画案が出され、同年６月 21 日には発掘届出書の受理に至った。計画では周辺道路の高さに揃える形で墳丘の削平を行うことから、古墳の取り扱いについての協議に必要なデータを得るために、同年８月８日から同月 29 日にかけて範囲確認調査を実施した（これを第１次調査とする）。この調査では、予算等の制約で小規模なトレンチ調査にとどまったこともあり、古墳に直結するような遺構や遺物の確認には至らなかった。しかし、墳頂部からやや南西に降った地点で、２条以上からなる「溝状遺構」を確認し、古墳に関わる遺構である可能性を指摘することができた（富田林市教育委員会 2019）。

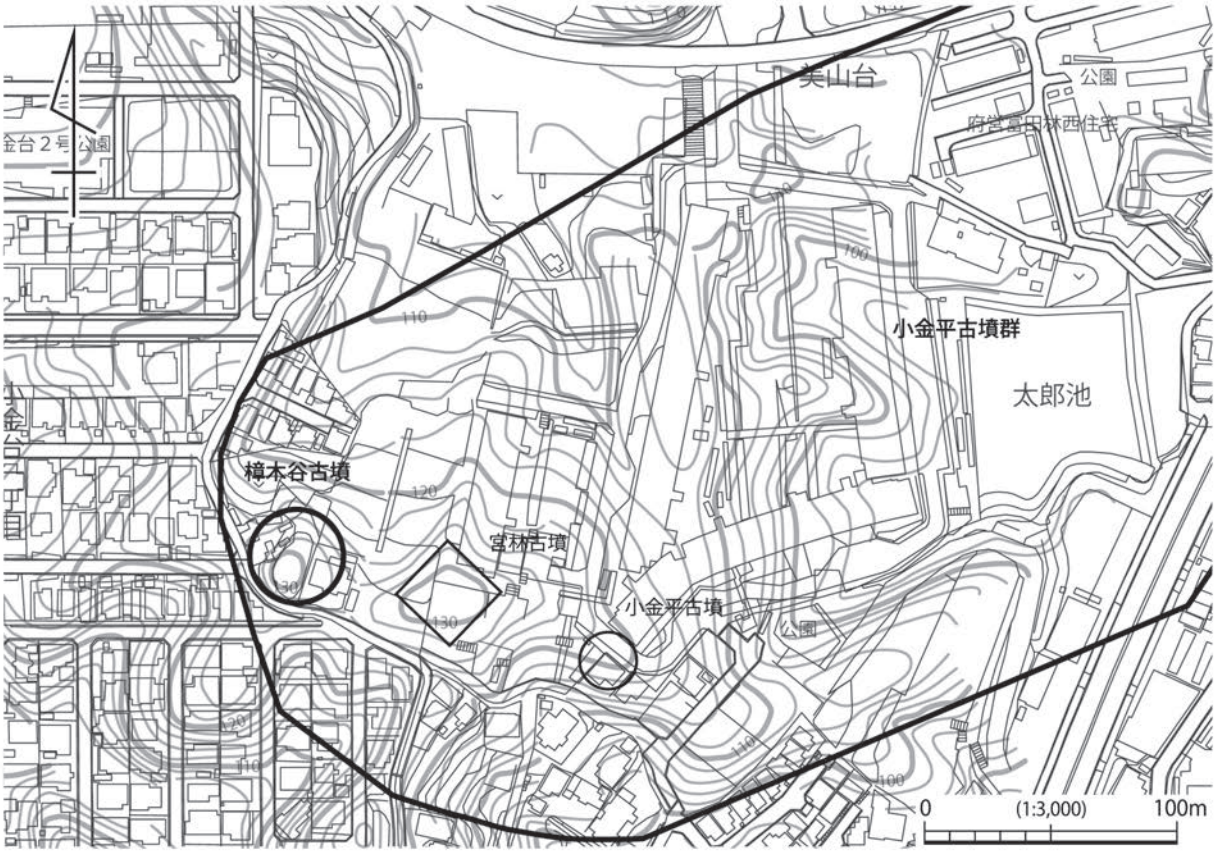


図12　調査位置図（Ｓ＝1/3,000）

この結果をふまえて引き続き協議を行ったが、建築計画の変更すなわち墳丘削平の回避はできないとの結論に至った。しかし、予算確保や調査体制整備の問題から同年度中に発掘調査を実施することは困難であったため、令和元年度に第２次調査として古墳全面の発掘調査を実施することになった。現地調査は令和元年５月 30 日から８月 29 日にかけて実施し、実働日数（安全管理に関する作業のみの日は除く）は 51 日であった。発掘調査面積は約 460 ㎡である。

第２節　調査の方法

第１次調査ではさまざまな制約もあり、墳丘全体の除草作業を実施することができなかったため、作成した現況測量図は未完の状態であった。今回、掘削を行う前に除草作業と並行して平板測量を行い、今回の調査対象範囲をカバーした現況測量図（図 13）を作成した。

調査序盤は、墳丘東崖面および石材が散乱する墳丘南裾部を精査することが、埋葬施設の有無を確認する近道であると考え、作業を進めていった。しかし、東崖面については、草木による撹乱が想定以上に著しかったことに加え､夏場ということもあり新たに露出させた面の乾燥が早く、土層の検討作業は一向に進まなかった。また、散乱する石材が古墳に伴わないものであることも早々に判明した。これらの状況から、埋葬施設の有無については、墳丘を面的に掘り下げる方法へと切り替えざるを得なくなり、第１次調査の１トレンチ東壁を利用した土層観察用のセクション（図 14・16　Ｘライン）を設定したうえで、人力による掘削作業を進めながら検討を行った。墳丘上に堆積した土は厚くなく、葺石等の外表施設もなかったが、草木の根による撹乱は崖面と同様に著しく、排土の搬出もすべて手作業であったことに加え、梅雨の天候不順や夏場の酷暑もあり、ほとんどの時間を表土掘削作業に費やすことになった。

遺構面（墳丘）を露呈させながら、完掘後の墳丘を平板によって測量し、全景の写真撮影はドローンによって行った。後述するように墳丘はすべて地山であったため、調査後の安全等も考慮して大規模な断ち割り等は行わなかった。開発対象範囲内で調査を行うことができなかった部分については、造成工事の際に立会調査を実施する予定である。なお、土地所有者の意向により、一部を除いて埋め戻しは行わずに現地調査は終了となった。

写真３　墳丘南部の除草作業風景（南西から）

写真４　除草作業後の墳丘崖面（南から）

現地調査日誌

5月

30日（木）晴れ　本日より、現地での作業を開始とする。東崖面と墳丘南西部に分かれて除草作業を行う。

31日（金）曇り時々雨　東崖面と墳丘西部の除草作業を行う。

6月

３日（月）晴れ　南崖面と墳丘北部の除草作業を行う。第１次調査で未測量であった墳丘部分において、平板による等高線を作成する。

４日（火）晴れ　北西崖面の除草作業を行う。引き続き、墳丘の等高線を作成する。任意の測量杭を新規に設置する。

５日（水）曇り　第１次調査の１トレンチの再発掘を開始する。昨日設置した杭へのレベル移動を行う。

６日（木）晴れのち曇り　１トレンチの再発掘を行う。第１次調査で測量できなかった墳丘裾部や周辺部分の等高線を作成する。

７日（金）・10日（月）　雨のため、作業中止とする。

11日（火）曇り時々雨　墳丘東部から南部にかけて、崖面の表土掘削を行う。墳丘南側の裾部に散乱する石材の周囲を掘削する。

12日（水）曇りのち晴れ　昨日と同じ箇所の掘削を行う。崖面は根による激しい撹乱を受けていることが判明。散乱する石材周辺や直下から、多数のコンクリート片が出土する。

13日（木）晴れ　引き続き、崖面と墳丘南側の裾部の掘削を行う。崖面は表面の乾きが早く、分層等の作業が進まないため、再発掘した１トレンチの一部を断ち割り、墳頂部からも土層の検討を行う。

14日（金）曇り一時雨　墳頂部の一部をさらに掘り下げる。崖面掘削で生じた排土を、墳丘外周から古墳北側の谷部へ運び出す。

17日（月）曇りのち晴れ　１トレンチの再発掘を進めていく。新たに断ち割った部分で確認した土層については、すべて地山の一種であるとの結論に至る。並行して、１トレンチ西側から表土掘削を開始していく。崖面掘削で生じた排土の運び出しが完了する。

18日（火）曇り　墳丘南側の裾部の石材付近を断ち割り、土層状況を確認する。墳丘崩落土の直下で地山を確認し、埋葬施設の痕跡が認められないことを確認する。墳丘南部を中心に表土掘削を進める。

19日（水）晴れ　墳丘の表土掘削は南西部に進んでいく。根による撹乱が著しく、掘削作業が難航する。

20日（木）快晴　引き続き、墳丘南西部の表土掘削を行う。２トレンチ周辺にあった近代以降のマウンドの除去が完了する。

21日（金）曇りのち雨　引き続き、墳丘南西部の表土掘削を行う。15時過ぎに少雨で中断し、その後再開するが、16時に再び降り出したため作業を切り上げる。17時に豪雨となる。

24日（月）晴れ時々曇り　墳丘西部へと表土掘削を進めていく。

25日（火）晴れ　墳丘北西部へと表土掘削を進めていく。根の除去方法についての習熟度アップにより、作業速度が大幅に改善される。

26日（水）曇り　墳丘北西部から北部へと表土掘削を進めていく。

27日（木）　雨のため、作業中止とする。

28日（金）曇り　墳丘北部および１トレンチ東側の表土掘削を進めていく。表土からはほとんど遺物が出土しないが、墳頂部から北側にかけては近代以降の遺物が比較的多い。

7月

１日（月）　雨のため、作業中止とする。

２日（火）曇り　引き続き、墳丘北部および１トレンチ東側の表土掘削を進めていく。後者はやはり近代以降の遺物が多い。尾根状になっている北部で、地山面の傾斜変換点を確認する。

３日（水）曇りのち雨　引き続き、墳丘北部および１トレンチ東側の表土掘削と、１トレンチの再発掘を進めていく。夜に大雨が長時間降るとの予報のため、午後は墳丘周辺の養生を念入りに行う。

４日（木）曇り　墳丘北部および１トレンチ東側の表土掘削を仕上げる。墳丘北西部の資材置き場を撤去する。

５日（金）曇り　資材が置かれていた部分の表土掘削を行う。未着手であった墳丘南東部の表土掘削も行い、排土は墳丘外周から古墳北側の谷部へ運び出す。

８日（月）晴れ　引き続き、墳丘南東部の表土掘削を行う。

９日（火）曇りのち雨　墳丘南部から崖面にかけての掘削を行う。16時から大雨となり、作業を切り上げる。

10日（水）曇りのち雨　墳丘南西部から崖面にかけての掘削を行う。切り株を除去しながら、崖面付近に堆積した流土を除去する。須恵器が初めて出土する。

11日（木）　雨のため、作業中止とする。

12日（金）曇りのち晴れ　墳丘西部から崖面にかけての掘削を行う。

16日（火）晴れのち曇り　引き続き、墳丘西部から崖面にかけての掘削を行う。基準点の設置と、既存杭の座標への位置付けを行う。

17日（水）晴れ　引き続き、墳丘西部から崖面にかけての掘削を行う。崖面付近はテラス状の平坦面や小さな隆起が存在したが、流土によって形成されたものであることが判明する。

18日（木）曇りのち雨　墳頂部から東崖面にかけての掘削を行う。14時から雨のため作業を切り上げる。

19日（金）・22日（月）　雨のため、作業中止とする。

23日（火）　晴れ　墳丘北東部から崖面にかけての掘削を行う。並行して、１トレンチで確認している溝状遺構の続きの検出作業を行う。埋土は一様でないため、面的な分層作業を行う。

24日（水）　晴れ　墳頂部を中心に精査し、溝状遺構の範囲を確認する。平面図を作成し、土色を記録する。その後、土層観察用のセクションを設定し、埋土の掘削を行う。墳丘の掘削が完了した範囲については、平板による等高線の作成を行っていく。

25日（木）　晴れ　溝状遺構埋土の掘削と、墳丘の等高線を作成する。墳頂部の精査も進めるが、溝状遺構以外の遺構は確認できない。

26日（金）曇り一時雨　墳丘北西部の精査、および溝状遺構埋土の掘削を行う。

29日（月）晴れ　墳丘北部の精査、墳丘の等高線を作成する。

30日（火）晴れ　昨日と同様の作業を行う。

31日（水）晴れ　土留めを設置するまで掘り残していた墳丘北東部の表土掘削を行うが、現場開始以来で一番の暑さにより難航する。上半部には近代以降の遺物が含まれる。土留め外側の除草作業を行う。

8月

１日（木）晴れ　引き続き、墳丘北東部の掘削を行うが、昨日に続く酷暑で難航する。表土直下には流土と思われる層の堆積があること

を確認する。現場周辺でPL花火芸術による交通規制が行われるため、午前のみの作業とする。
２日（金）晴れ　墳丘北東部の掘削を行う。崖面の草が再び繁茂してきたため、東崖面で除草作業を行う。
５日（月）晴れ　墳丘北東部の掘削と、東から南崖面にかけての除草作業を行う。墳丘の等高線を作成するが、台風に伴う強風で難航。
６日（火）曇り時々晴れ　墳丘および墳丘裾部の等高線を作成する。明日の空中写真撮影に備えて、墳丘崖面から裾部にかけて掘削が不十分であった箇所の仕上げ作業を行う。
７日（水）晴れのち曇り　空中写真撮影の開始まで、調査区全体の掃除を行う。10時半よりドローンによる空中写真撮影を開始するが、電波状況が悪く、離着陸場所を変更して実施する。終了後、地上から各部の写真撮影を行う。
８日（木）晴れ　墳丘の等高線の作成、および旧トレンチ位置や傾斜変換点等の実測を行う。墳丘南北の断面観察用セクションを除去する。白石耕治氏（和泉市いずみの国歴史館）が視察に訪れる。
９日（金）晴れ　１トレンチ延長上のセクションの断面実測を行い、終了後に除去する。撹乱と考えていた土坑状のものを再検討したところ、柱穴であることが判明する。実測図の作成、写真撮影を行う。
13日（火）～16日（金）　お盆のため、作業休みとする。ただし、大型台風接近に伴い、14日は安全対策を急遽行う。
19日（月）曇りのち大雨　柱穴の周辺を精査し、１トレンチの側溝を利用したサブトレンチを設定するが、遺構は確認できない。台風に伴う雨で東崖面の一部が崩れたため、土嚢を積み上げて養生する。
20日（火）曇り時々晴れ　溝状遺構のセクションを除去していく。並行して、溝状遺構および柱穴の平面図を作成する。昨日の大雨により墳丘の一部が周辺道路に流出したため、清掃を行う。
21日（水）曇りのち晴れ　溝状遺構の完掘作業を行い、補足的に断面実測図の作成を行う。
22日（木）晴れ時々曇り　溝状遺構の写真撮影を行う。石材散乱箇所の土層断面図を作成し、終了後に石材の周辺をさらに掘り進める。
23日（金）雨時々曇り　雨のため、安全管理に伴う作業のみ行う。
26日（月）晴れ　安全面の問題で未着手であった墳丘北西部の崖面付近を掘削する。すでに完掘済みと考えていた周囲を含めて、流土が残存していることが判明し、それらの除去を行う。近代以降の遺物が比較的多く出土する。
27日（火）曇りのち雨　昨日掘削した範囲の等高線を作成する。雨のため作業は11時半までとなる。
28日（水）　雨のため、作業中止とする。
29日（木）曇り時々晴れ　26日に掘削した部分の土層断面図を作成する。落ち込みの平面図にレベルを記入する。現地での作業は、一部の後片付け等を除いて本日で終了となる。

第３節　確認した遺構と遺物

（１）墳丘

ここでは、全面掘削前に作成した現況測量図（図 13）と、遺構面（墳丘）をすべて露呈させたうえで作成した完掘後測量図（図 14）を比較しつつ、調査前の所見と調査成果を述べていきたい。なお、第１次調査で明らかになったように、墳丘上には一部の範囲に流土が堆積しているが、それ以外は表土層直下が地山である。表土層と判断したなかに草木の撹乱を受けた盛土が含まれている可能性は否定できないが、あったとしてもごく限られていたと考えている。

墳丘崖面から墳丘裾部　古墳の南東側には民家が接しており、墳丘東部は崖状を呈している（この部分を東崖面と呼ぶ）。墳頂部と裾部の比高は最大で約 4.8m であり、上半部は急傾斜、下半部は垂直に近い。図 12 は、民家が建築される以前である昭和 50 年代前半の地形図と、現況の地形図を重ねたものであるが、本来の墳丘東部は他の斜面に比べて緩やかに傾斜していたようである。その後、民家の建築に伴って改変を受けたと考えられ、宮林古墳の事前調査時に撮影した昭和 58 年の空中写真（図版３）をみると、現在と同様の景観になっていたことが分かる。

すでに述べたように、この東崖面を精査することで埋葬施設の有無に関する手がかりが得られるのではないかと考えたが、草木の根による撹乱等で詳細に観察することができなかった。ただし、観察できた範囲では、現況面に近い部分を除いてはすべて地山であり、遺構の存在を示すような土層の乱れは認められなかった。なお、東崖面と民家の間の平坦部については、安全上の問題から調査を行っていない。

墳丘南部も同様に崖状を呈している（南崖面と呼ぶ）。古墳の南側から西側にかけては道路が接しているが、上記の地形図によれば、道路の敷設以前も現在の形状とほぼ同じ里道があったよう

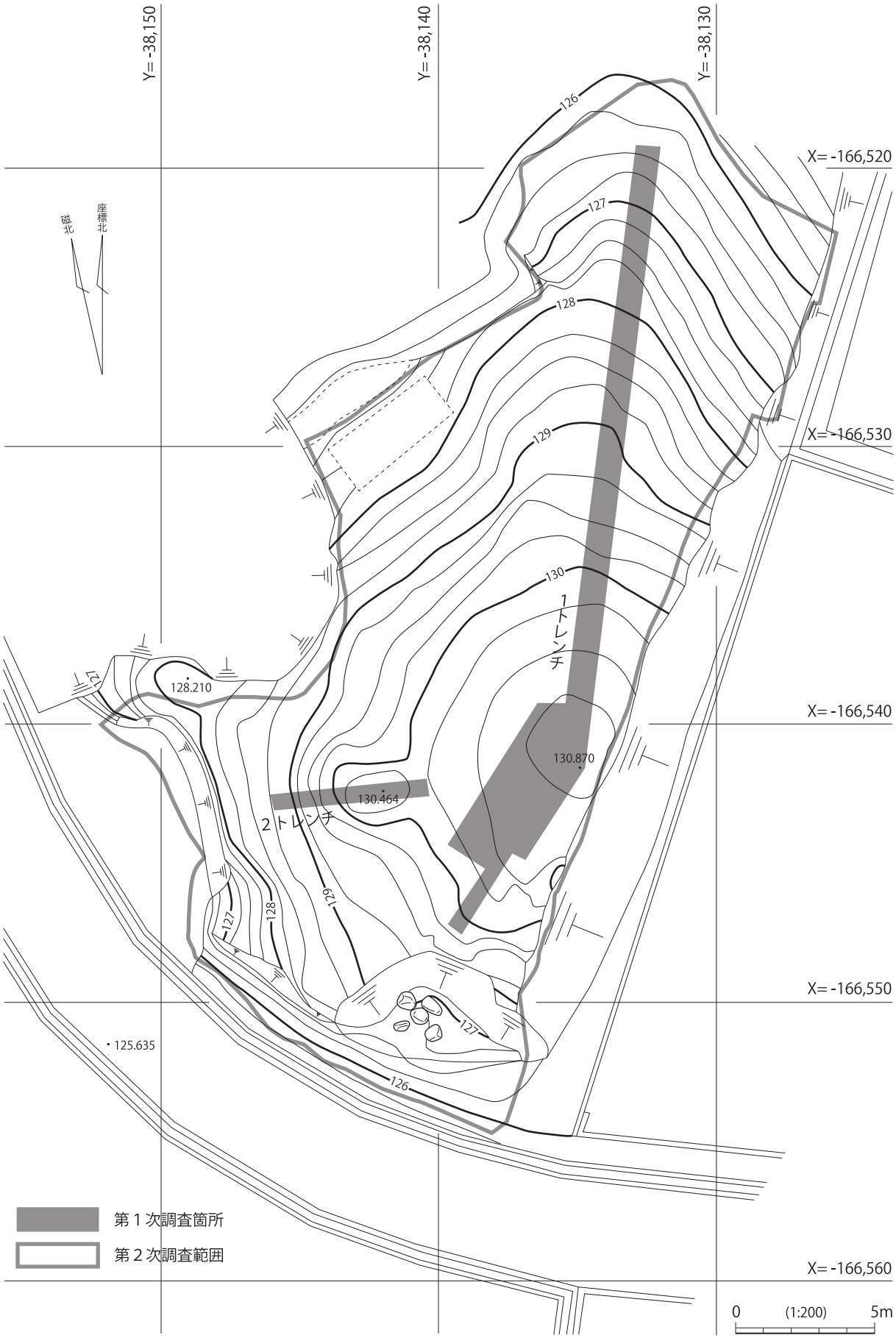


図13　樟木谷古墳現況測量図（Ｓ＝1/200）

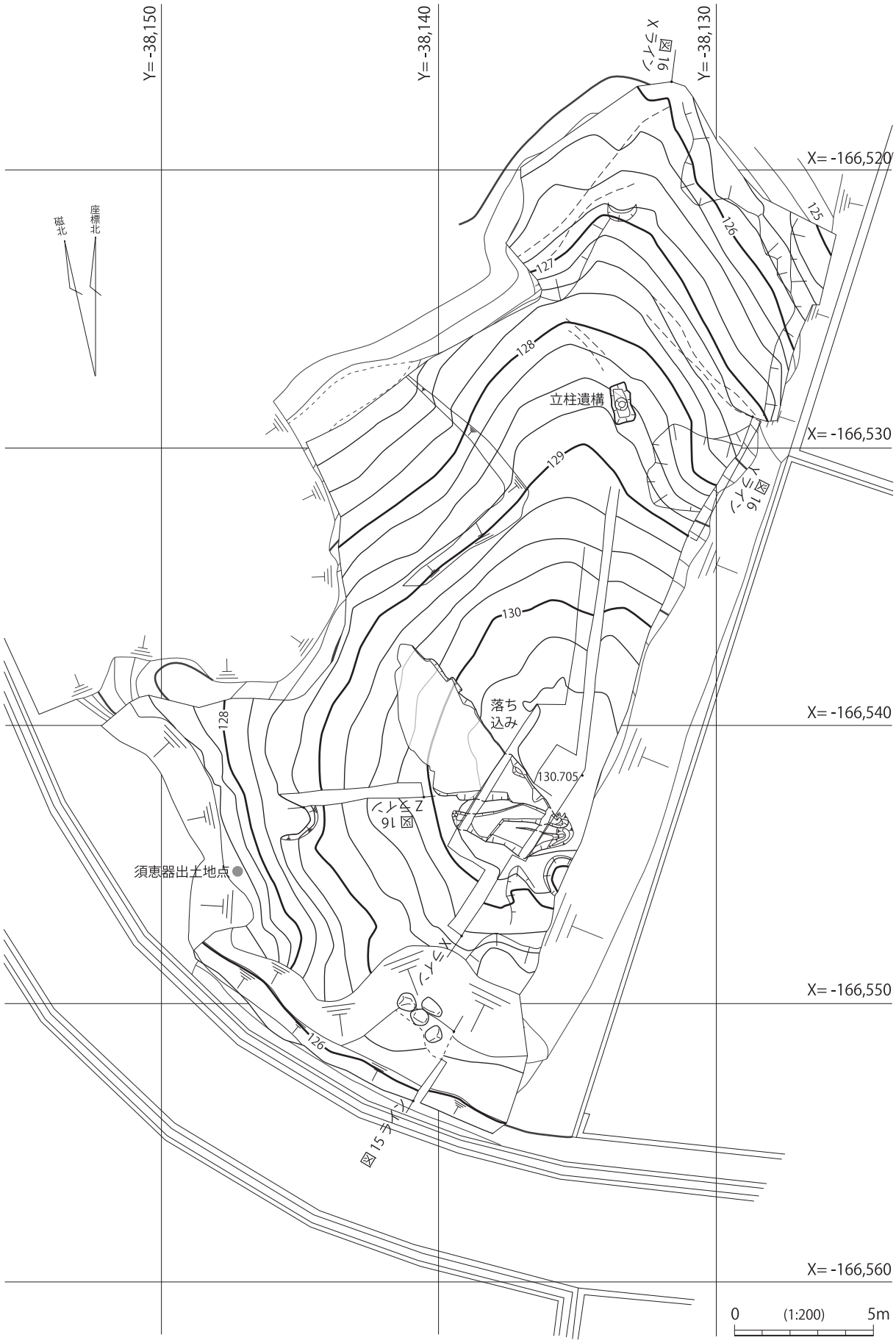


図14　樟木谷古墳完掘後測量図（S＝1/200）

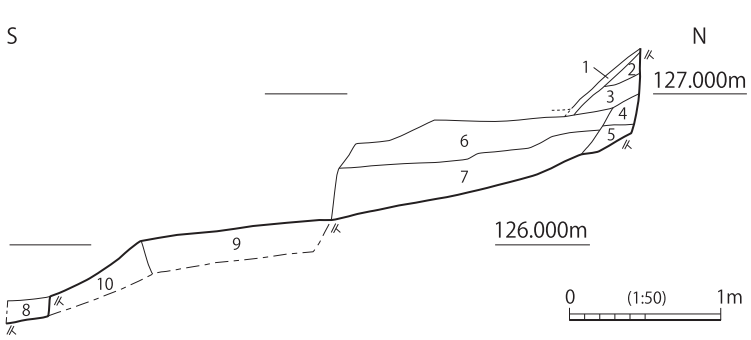
である。里道もしくは道路を敷設する際に、墳丘が削り込まれたと考えられるが、一部は古墳側に向かって大きく抉れられており、道路面から一段上がった平坦面に 60cm 前後の石材が５つ散乱している。これらは平成 26 年の現地踏査の際にも目視で確認しており、墳丘南側という方位からみて横穴式石室の残骸である可能性を考えていた。しかし、調査前に土地所有者から聴き取りした話では、隣接する民家に庭石を設置した際、余ったものをここに置いたらしいという。真相は不明であるが、確かに現在みられる庭石には同種と思われる石材が使われている。

裾部の石材の状況を確認するために周囲を掘り下げたところ、石材はコンクリート片を含む灰黄褐色粘質土層（図 15 の土層番号６）の直上に置かれていることが分かった。石材には番線が絡まっており、別の場所から石材を吊り上げる際に括り付けられ、設置後取り外されることなく放置されたものと思われる。それが行われたのが前述の庭石設置時かどうかはともかく、古墳とは無関係の石材と考えるのが妥当であろう。

古墳西側の裾部は駐車スペースとして使用されている平場があり、接する範囲は崖面を呈している。古墳北西側についても、現況では笹が繁茂して状況が分かりにくくなっているが、裾部に資材置き場が設置されており、それによって大きく抉られている。両者の間は半島状に狭く突き出した状態になっており、標高 128m 付近には平坦部が存在したが、流土によって形成されたものであることが完掘により判明した。

墳頂部から墳丘斜面　墳頂部から墳丘西部にかけては小さなマウンド状の高まりが認められたが、第１次調査の２トレンチでの所見により、近代以降の所産であることが判明している（図 14・16　Z ライン、および富田林市教育委員会 2019）。前回の報告では、近代に墳頂部付近で土採りが行われていたことを紹介し、その際の排土が積み上げられたのではないかと推定したが、土地所有者に改めて聞き取りしたところ、諸般の事情により施工直前で中止になったとのことである。しかしながら、この高まりの構成土は、土質からみて地山の掘削土に由来するものであることは間違いなく、何らかの目的で墳頂部が掘削され、この部分に寄せられたと理解するのが自然である。２トレンチ西端付近にある撹乱の埋土からは、昭和後半期以降のものが出土しており、マウンドの構成土がその上に堆積していることが今回明らかになった。この状況からみて、民家建築により墳丘東部が削られた昭和 50 年代中頃に、墳頂部の掘削も行われたと推測される。

墳丘北部の標高 127.5m 前後には、資材置き場が存在していた。完掘後測量図をみると、当該部分周辺の等高線が内側に入り込んでいるが、これは資材置き場を設置する際に一帯を削り込んだことによるものと考えられる。



1．表土　　2．7.5YR 6/8 橙色砂礫
3．10YR 6/2 灰黄褐色粘質土
4．10YR 6/6 明黄褐色砂礫
5．10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土
6．10YR6/2 灰黄褐色粘質土に 10YR6/8 明黄褐色粘質土がブロック状に多く混じる
7．10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土に 10YR6/8 明黄褐色粘質土がブロック状に混じる
8．10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土
9．10YR6/8 明黄褐色砂礫【地山】
10．10YR6/8 明黄褐色粘質土に 2.5Y7/1 灰白色粘質土が混じる【地山】

図15　墳丘南裾部土層断面図（Ｓ＝1/50）

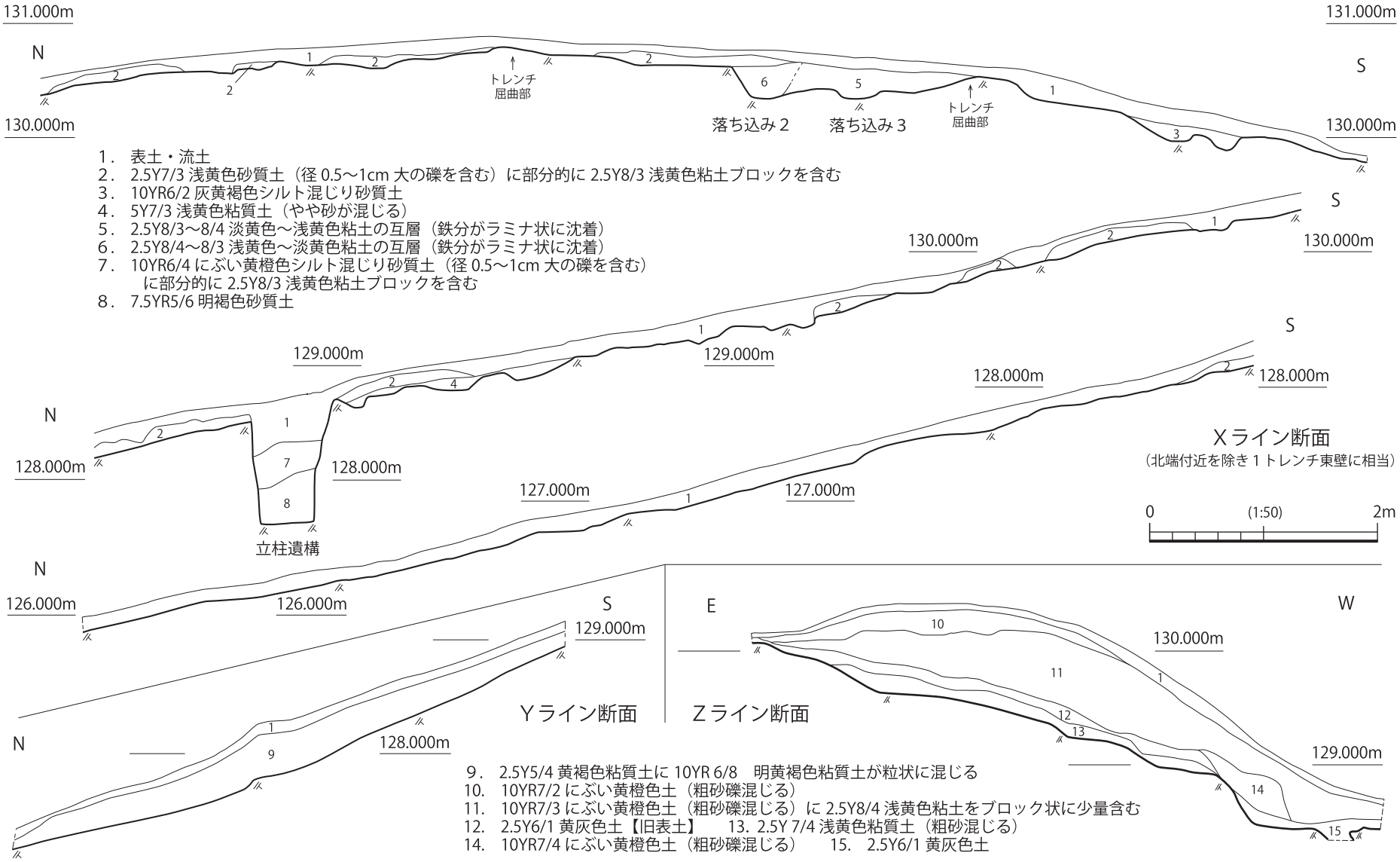


図16　墳丘土層断面図（Ｓ＝1/50）

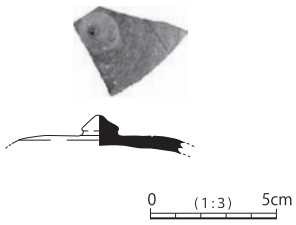


図17　出土遺物（Ｓ＝1/3）

墳丘北東部は、本来の形状を最も残していると考えた部分である。現況測量図では、標高 129m の等高線が外側に膨らんでおり、低い部分に向かって尾根状の緩斜面が形成されている。この 129m の等高線を西側へと追っていくと、ちょうど傾斜変換点にあたっている。完掘後測量図にはこのレベルに傾斜変換点はなく、後世の周回路の痕跡を示しているものと思われる。また、完掘後の標高 127.5m から 127.25m にかけてのあたりで犬走り状の平坦面が認められるが、これは隣接する民家の塀の角に向かう位置にあたることから、東崖面の裾と古墳側を行き来するために、後世に掘り込まれたものと考えられる。これに接する上部は浅く窪んでいるが、関連は不明である（図14・16　Yライン付近）。

このほかにみられる傾斜変換点としては、墳丘北部における現況面での標高 126.75m 付近である。これは完掘後測量図にも残存する形で現れており、標高 126.75m と 126.5m の間で等高線の幅が広くなっている。古墳に隣接する民家の北東側は駐車場になっており、調査地との境界には大幅に削り込んだうえで擁壁が設置されているが、尾根状部分から擁壁までの間、すなわち全体の等高線が東へと折れ曲がっていく一帯においても、明瞭ではないものの傾斜変換点が認められる。調査で確認した地山面の状況は、それより標高が低い部分は地山面の凹凸が目立っており、さらに完掘後測量図の標高 125.75m 付近にみられる傾斜変換点から下位についてはより顕著で、手が加わっていないような印象を受ける。

遺物としては、近代以降のものやその蓋然性が高いものを除けば、須恵器の坏蓋片が唯一である（図 17)。墳丘西部で現代の出入口として利用されていた部分の崖面付近（図 14 で「須恵器出土地点」と示した地点）を掘削していた際に、流土層内から出土した。宝珠つまみをもつ天井部の破片で、ヘラ記号と思われる線刻が認められる。欠損のため全体の形状は分からないが、所属時期は７世紀代であろう。

第１次調査では、不明鉄製品１点が１トレンチの地山面直上から出土しているが、今回もその周辺から用途不明の鉄製品が数点出土している。東崖面付近は流土が他の部分よりも厚く堆積しており（図 16)、墳頂部が一定の削平を受けていることを示しているのであろう。この土層には近代以降の磁器片が比較的多く含まれており、不明鉄製品はそれらと一緒に出土している。第一次調査時は、鉄製品が墳頂部から流失した副葬品の一部である可能性も考えていたが、この状況からみて古墳とは関係のないものと考えるのが妥当であろう。

（２）落ち込み

第１次調査の１トレンチでは、墳頂部から南西に下がった地点において落ち込みを確認した。前回報告では「溝状遺構」としたが、今回の調査結果を受けて呼称を変更する。平面形では３つの遺構が切り合っているようにみえるが、埋土は区別できないほど類似している。そのため、それぞれ時期差がほとんどなかったか、底面がフラットでない一体の遺構であったと考えらえる。ここでは便宜上、北側から順に落ち込み１、２、３と呼称することにしたい（図 18)。第１次調査の断面観察では、落ち込み２が３を切っているような状況を辛うじて確認し（図 14・16　Ｘライン)、今回の再発掘では示すことができなかったが、完掘した直後の平面形も齟齬のない形状で

あった（富田林市教育委員会 2019）。また、落ち込み１は平面形を見る限りでは落ち込み２に切られているが、１トレンチの東壁付近で完全に重なっており、断面（図 16）には現れていない。

今回の調査では、落ち込み２と３が１トレンチ西側ですぐに収束することを確認した。落ち込み１については、北東側の肩部は直線的で掘り込みも垂直に近いが、対面する南西側の肩部ラインは不明瞭で、北に下降しながら収束する。直交するように設定したセクションをみると、南西側の肩部は北東側に比べると 25cm ほど低くなっており、肩部の流出すなわち墳頂部が一定の削平を受けていることを示しているのであろう。なお、１トレンチ東側は草木の根による撹乱を受けていることもあり、落ち込みがどこまで続いていたのかは判然としない。

第１次調査では埋土から遺物を確認できなかったが、今回も全く認められなかった。墳頂部に近いことから、埋葬施設に関わる遺構である可能性は完全に否定できないものの、所属時期や性格については確定することができない。

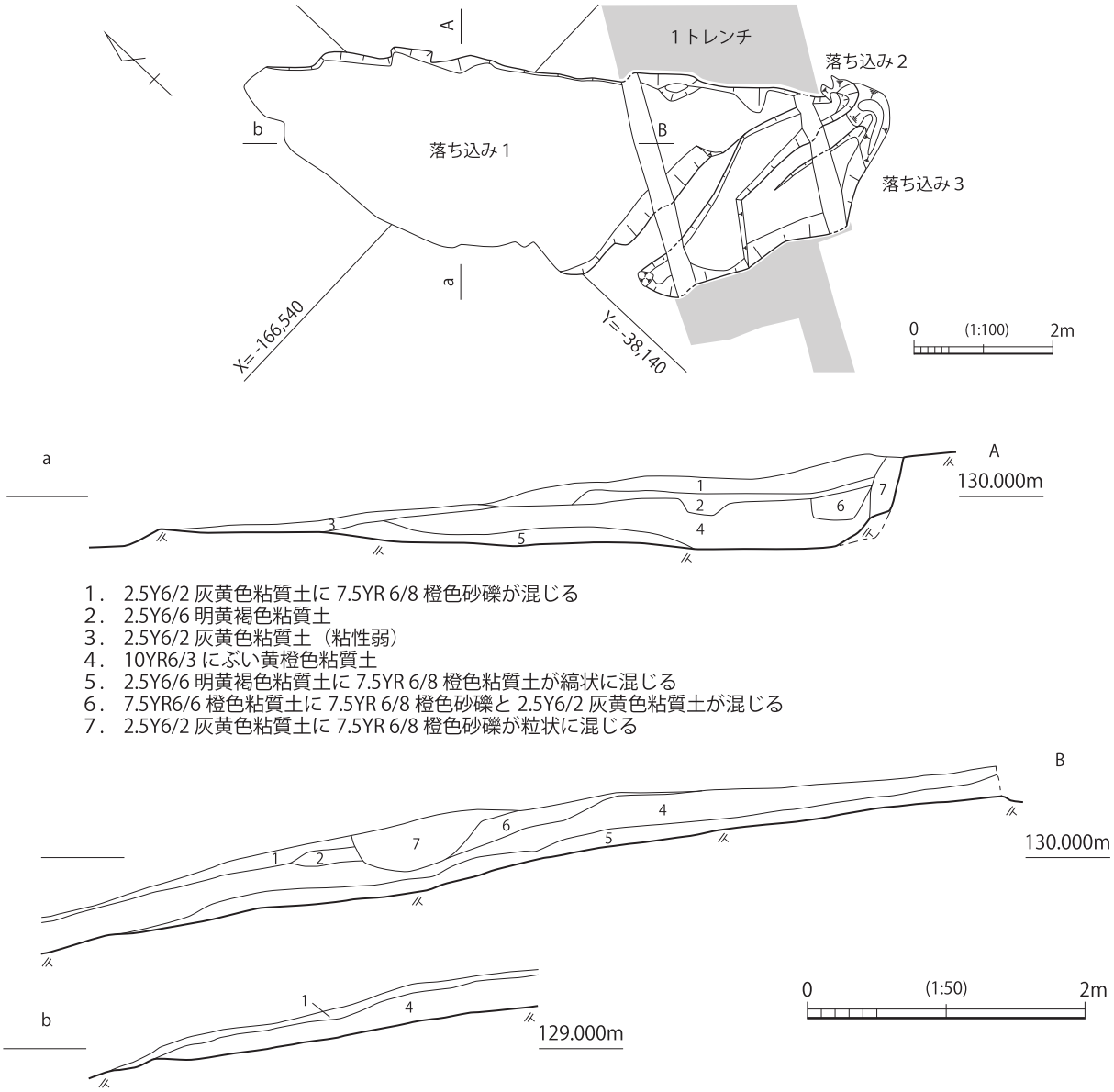


図18　落ち込み平面図（Ｓ＝1/100）・断面図（Ｓ＝1/50）

（3）立柱遺構

墳丘北部の尾根状にのびる標高 128.5m 前後で、１基の柱穴を確認した（図 14・19）。この遺構については、大部分が第１次調査の１トレンチにかかっており、当時は撹乱として認識していた。今回、１トレンチを再発掘する過程で、前回調査の掘削底は地山に達していないことが判明した。そこで改めて検討を行い、掘方が垂直に近いことに着目してバックホウによる掘削痕の可能性を考え、墳頂部の削平を示す一つの根拠になるのではないかと考えた。その後、柱痕を確認したことで遺構と認識を改めることになったが、上記の経緯により、掘方に直交した土層断面を記録することができなかった。よって、掘削作業中のメモから復元した断面模式図も合わせて提示しておく（図 19）。

掘方は南北約 1.4m、東西約 0.7m の長方形である。墳丘斜面上に位置しているが、掘方の底面は標高約 127.55m 前後でほぼ水平となっている。南側肩部からの深さは最大で約 1.1m で、そこからさらに中央部が柱痕状にくぼむ。模式図に示したように、この柱痕は掘方の底面よりも高い位置、すなわちにぶい橙色砂質土層（図 19 の土層番号２）の直下から確認することができた。掘方底面での直径は約 45cm であるが、柱痕の底面で計測すると直径約 22cm であり、断面形状をみると北南側が緩やかになっている。柱を引き抜く際に南側へ倒したことによって、柱痕跡が外側へと広がったのであろうか。杭状のものであった可能性を除外すれば、立っていた柱の直径は最大で 20cm 程度と推測される。なお、これに対応する遺構がないかどうか周囲を精査したが、確認できなかった。よって建物を構成する柱穴ではなく、単体で柱が立っていたことになる。遺構埋土には遺物が全く含まれておらず、所属時期も不明であるが、立柱遺構と呼称することにしたい。その性格については次節で検討を行う。

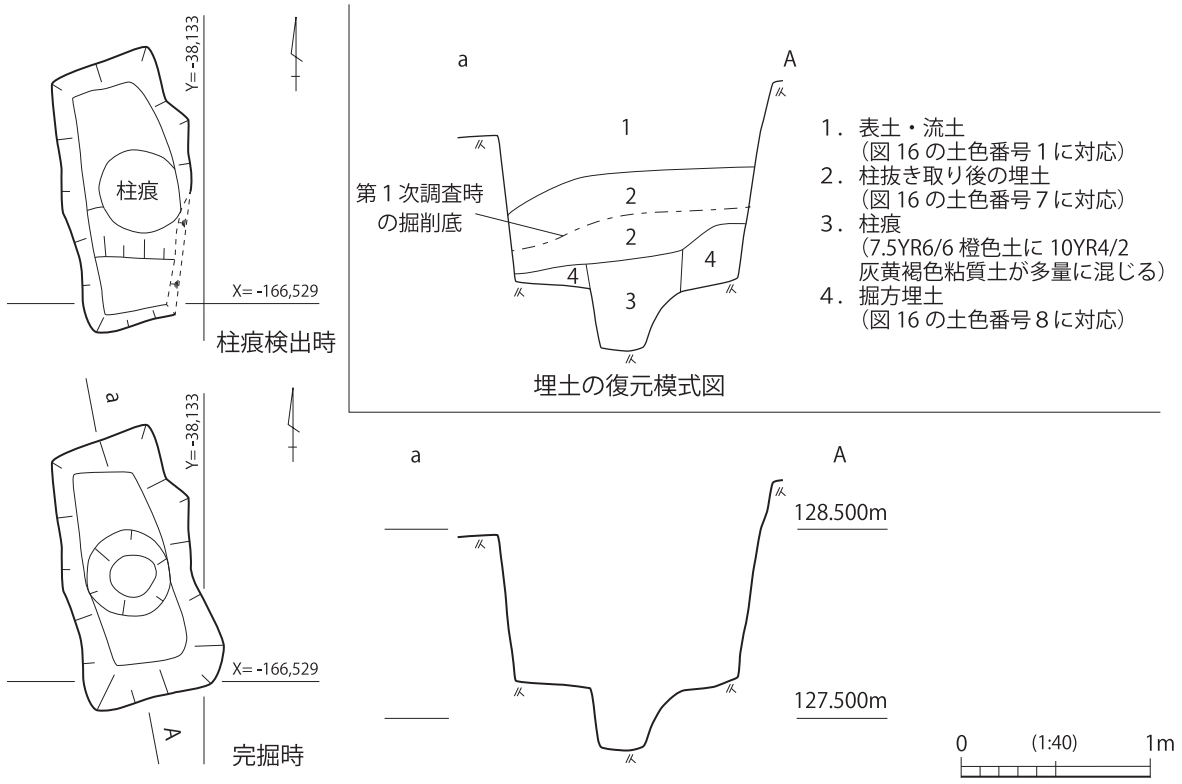


図19　立柱遺構平・断面図（S＝1/40）

第４節　古墳の復元

（１）はじめに

これまでみてきた成果をふまえて、本節では古墳の復元を行う。表土と一部の流土を除去すれば、頂部から裾部まではすべて地山であり、葺石や埴輪などの外表施設もない。埋葬施設も確認することができなかったため、見方を変えれば、古墳と断定できるだけの証拠が得られなかったのも事実である。しかし、近接する宮林古墳が地山削り出しによる墳丘で、外表施設をもたないことを考慮すれば、それらが古墳であることを否定する材料にはならない。同じ立地条件で宮林古墳と並ぶように存在することを重視し、古墳であるという前提のうえで検討を進めていく。

（２）墳丘

復元にあたっては、まず宮林古墳の調査成果を援用する（図 20）。発掘調査で確認した墳丘頂部の標高は約 132.5m であり、樟木谷古墳に比べると約 1.8m 高い。調査担当者は、方墳であるならば一辺 15m 前後いう見解を示しつつも、「円墳の可能性も充分に考えられ」、「規模についても同様に、明確にはしがたい」とも述べている（富田林市教育委員会 1985）。埋葬施設の位置を墳丘の中心と仮定し、一辺 15m の範囲で見積もると、墳丘裾は完掘後の標高 131m 前後に求められることになる。しかし、墳丘断面においてはそこに明瞭な傾斜変換点はなく、方形にめぐる等高線はさらに下位でも確認できる。方墳とした見解は妥当だが、墳丘範囲は検討の余地がある。

そこで、改めて旧地形図（図 12）を参照してみよう。等高線は２m 間隔であり、当然ながら発掘調査前の地形を示したものであるため、発掘調査後の測量図と単純に比較することはできないが、標高 128m までの等高線が宮林古墳に沿って方形状にめぐっており、126m の等高線は樟木谷古墳に接続していることが読み取れる。よって、両者間の谷部の標高は 127m 前後に求められ、これが一つの目安となる。それをふまえて宮林古墳の完掘後の墳丘断面図（図 20 のD−D’ライン）をみると、標高 127m 付近に地山の傾斜変換が認められ、明確な数値としては提示できないものの、墳丘範囲が一辺 30m 程度まで広がる可能性はあるのではないだろうか。

樟木谷古墳においては、墳丘北西部が後世の削り込みを受けながらも、おおむね直線的に等高線が推移する状況であり、本来の形状を比較的保っているとみられる墳丘北部から北東部にかけては、等高線がほぼ直角に屈曲している。よって、宮林古墳と同様に方墳であったと考えるのが妥当であろう。墳丘裾については、先にみた標高 126.75m 付近にみられる傾斜変換点が唯一の候補として挙げられる。これは、旧地形図から読み取った標高 127m という目安とも齟齬がない。

墳丘西部から南部にかけては後世の改変が著しいが、旧地形図において樟木谷古墳と宮林古墳を取り込むような形状を示す標高 126m の等高線が、現在の道路との境界ラインと重なっていることから判断して、墳丘南西辺の全体が道路よりも外側へ大きく広がっていたとは考えにくい。ほぼ垂直を呈する墳丘南崖面と、道路に向かって緩やかに下降する地山面の境目をみると、ここも完掘後の標高がほぼ 126.75m となっている。墳丘の形状は大きく失われているが、石材が散乱する平坦面は墳丘周囲の本来のレベルを反映したものであり、道路敷設の際に南側が削平されたことによって、現在の景観になったと考えたい。墳丘西側の駐車スペースに接する崖面上部で確認した地山面の標高は 127.25m 以上となっており、墳丘裾の標高が 126.75m という理解が正しければ、墳丘南西辺のラインは現存する崖面上部よりも外側に求めるべきであろう。

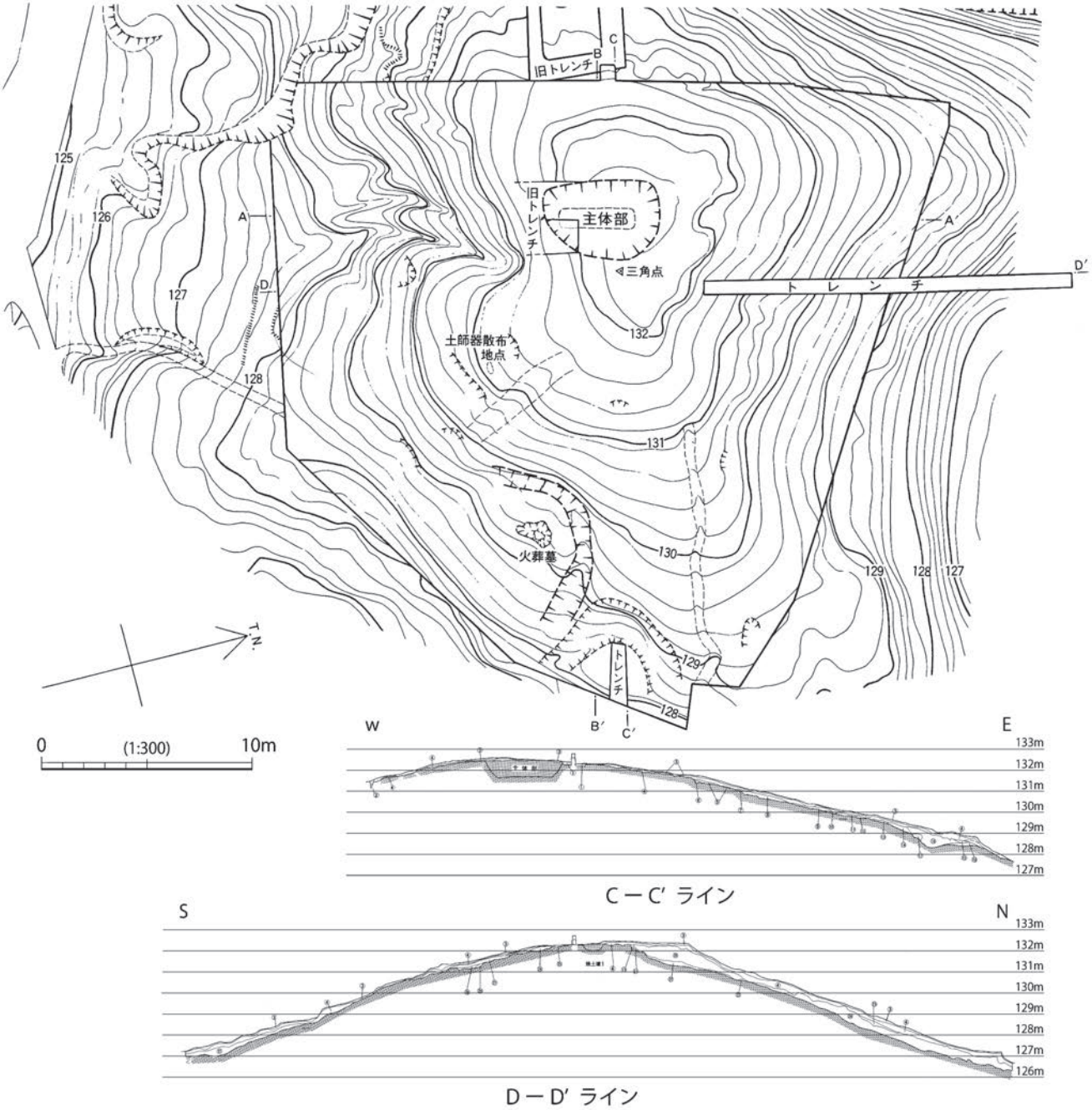


図20　宮林古墳の墳丘（S＝1/300）

（3）築造時期と埋葬施設

出土遺物については、流土内から須恵器坏蓋が１点出土したのみである。仮にこれが樟木谷古墳の築造時期を示す遺物であるとすれば７世紀代となり、小金平古墳との関係を考える必要がある。小金平古墳は横穴式石室を主体部とする直径約９ｍの円墳で、石室の中央東壁側付近で須恵器蓋坏、奥壁付近で須恵器高坏が出土している。高坏が蓋坏よりも古相を呈しており、それぞれの須恵器に伴って出土している鉄釘の形状も異なることから、追葬があったものと考えられる。樟木谷古墳と決定的に異なるのは、小金平古墳が丘陵斜面上に立地しており、標高の高い側に半円弧状の周溝を掘ることで墳丘を形作っているという点である（図 21）。今回の調査で出土した須恵器は、樟木谷古墳築造後の現存しない遺構に伴うもの、あるいは後世に混入した可能性も考

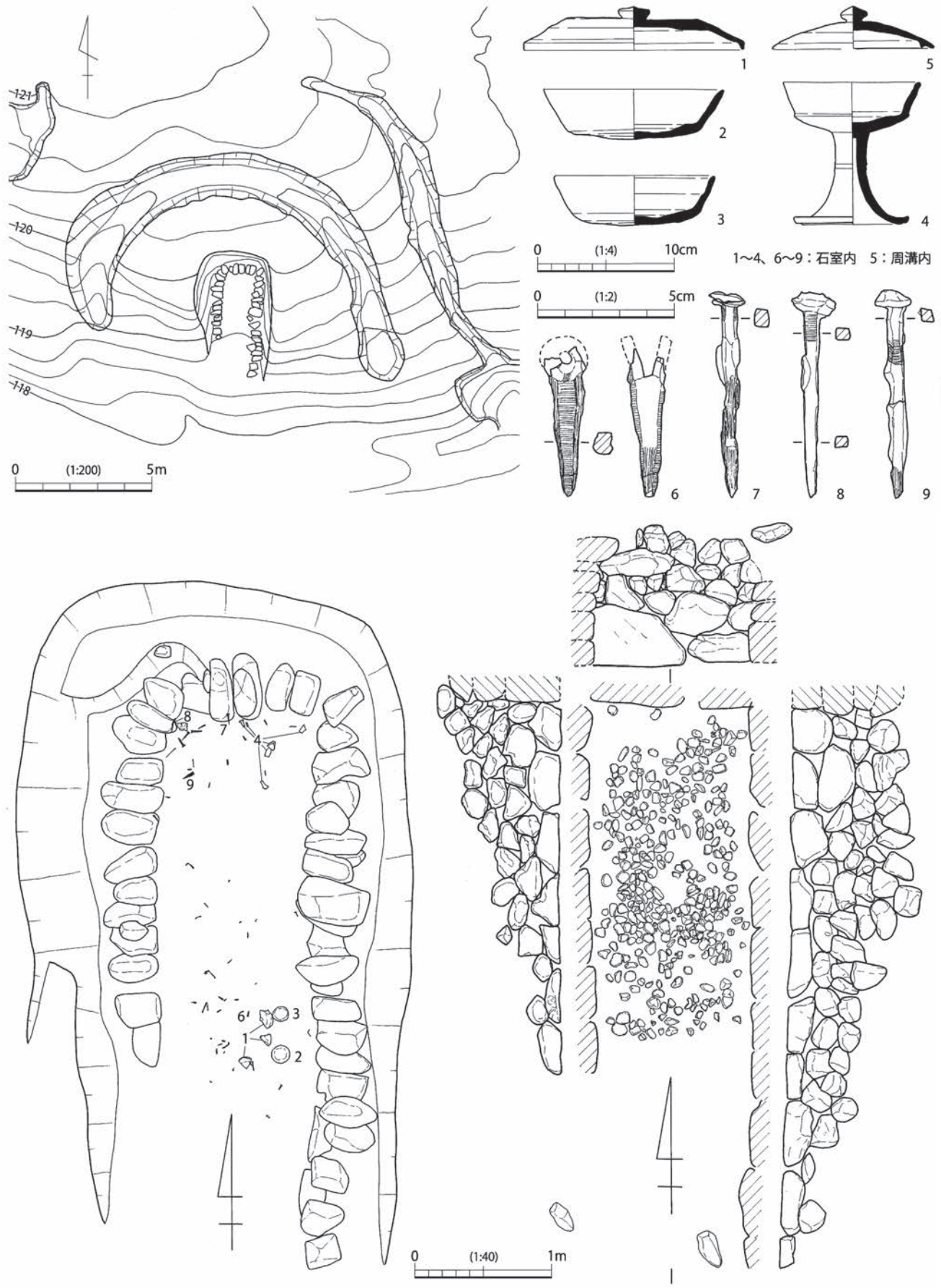


図21　小金平古墳
（墳丘：Ｓ＝1/200、須恵器：Ｓ＝1/4、鉄釘：Ｓ＝1/2、石室：Ｓ＝1/40）

えられ、この土器１点に引っ張られるのではなく、ほかに遺物が全く出土していないことに注意すべきであろう。すなわち、埋葬施設以外から古墳に伴う遺物が出土していない状況は宮林古墳と同じであり、これまでみてきた他の共通点もあわせて、４世紀後半の築造とみられる同古墳と近接する時期に築造されたとみるのが自然ではないだろうか。

埋葬施設については、残念ながら手がかりを得ることができなかった。宮林古墳における木棺直葬の墓壙の深度は検出面から約 80cm であり、仮に樟木谷古墳にも同様の埋葬施設が存在したとすれば、墳頂部において少なくともその深度分の削平を考えなければならない。これまでみてきたように、墳頂部が一定の削平を受けている蓋然性は高いが、埋葬施設の痕跡がなくなるほどの大規模な削平を考えるのであれば、本来の形状を一定とどめているとした墳丘北東部の斜面が、現状よりも急傾斜であったことも想定しなければならなくなる。しかし、それ以前の問題として、墳丘がどの程度南側や東側まで広がっていたのかが不明であり、完全に失われている部分に埋葬施設が存在した可能性もあるため、これ以上の推測を重ねることは控えておきたい。

最後に、落ち込みについて言及しておきたい。落ち込み３の北東側の肩部ラインは本来の遺構の向きを反映しているとみられるが、今回復元した墳丘北東辺とほぼ平行していることがわかる。方向の一致は単なる偶然と片付けることはできず、古墳と同時期の遺構と考えるのが自然であろう。遺構の底面が水平でないため、埋葬施設そのものにはなり得ないだろうが、位置からみてそれに付随する施設の可能性は残されていると考えている。具体的な機能等については、今後の課題としたい。

（４）立柱遺構の意義

このほか、墳丘北部で柱穴を確認したことは想定外であり、大きな成果であった。対応する柱穴が認められなかったため、建物を構成するものでないことは確かであり、立柱のほか、木製品の樹立、旗竿などの機能が想起される。落ち込みと一部にみられた撹乱以外で人間の活動痕跡がないことをふまえると、これも古墳と同時期のものである蓋然性が高い。柱穴はちょうど緩斜面となっている尾根状部分に位置しており、方墳のコーナー部分の斜面内に立柱が存在したのではないだろうか。

府内における立柱遺構といえば、柏原市玉手山丘陵での事例が有名である。そこでは埋葬施設を検出できなかったマウンドが３箇所で確認され、その斜面やテラス状に造成した面には、数本の立柱が列状に並んでいた。そのうち「第一立柱祭祀遺跡」と呼ばれているものは飛鳥時代に属するようであるが、そのほかの２箇所の立柱祭祀遺跡は時期が明確でない（堅田 1993・2003）。現時点ではこれ以外の事例との比較検討ができていないが、今回の遺構が稀有なものであることは間違いないと思われ、その性格については引き続き検討していきたい。

（５）おわりに

ここまで、得られた成果と調査担当者の見解を書き連ねてみた。推測を重ねすぎた感は否めないが、その結論として一辺約 29m の方墳という一つの復元案を提示しておきたい（図 22）。

樟木谷古墳は、行政上では小金平古墳群内の一古墳として登録されているが、前期古墳という推定が正しければ小金平古墳との時期差は大きい。確実な古墳としてはほかに宮林古墳しかない

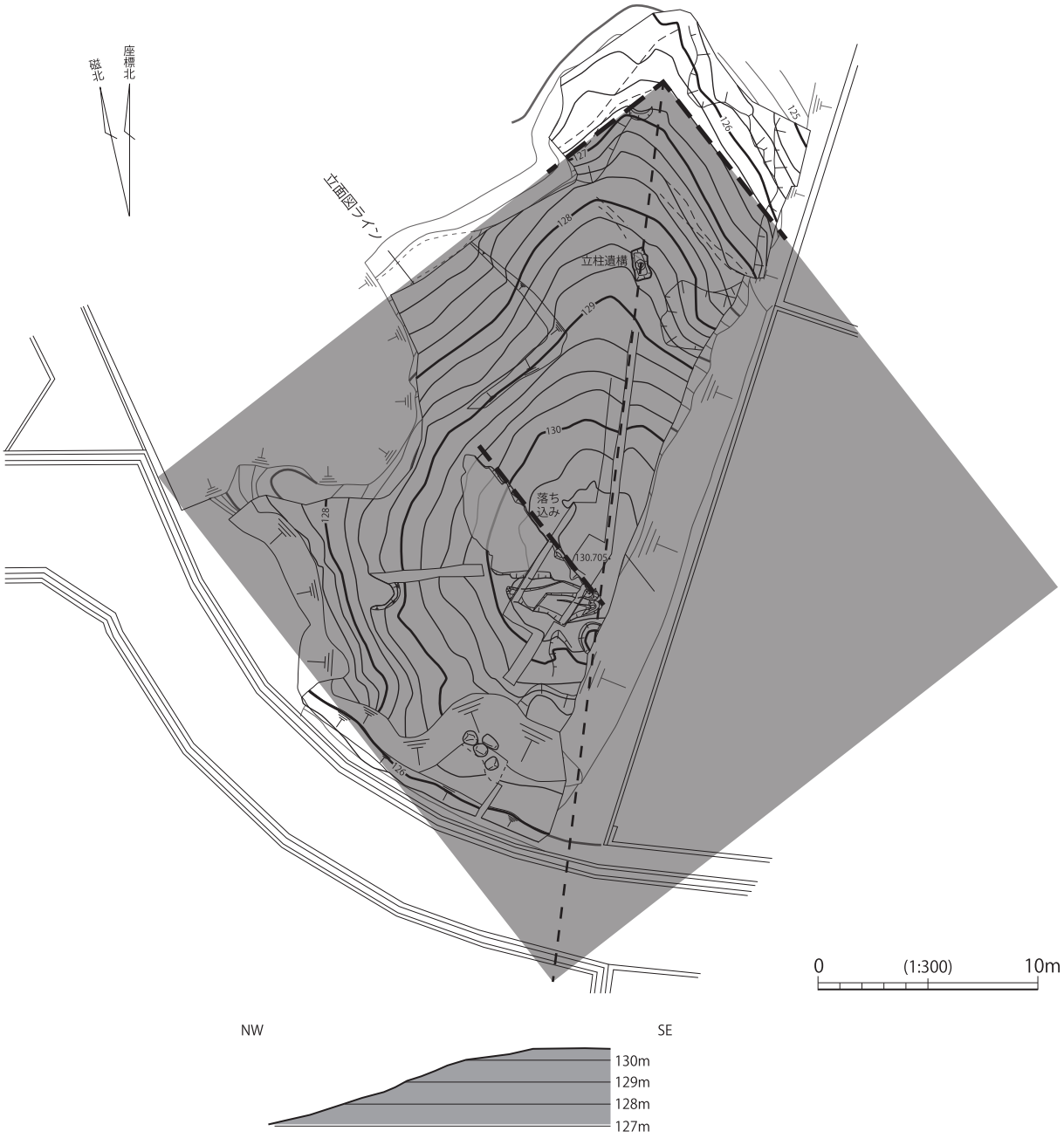


図22　樟木谷古墳復元案（S＝1/300）

ため、古墳群として取り扱うことには問題があるように思われる。それはともかく、樟木谷古墳と宮林古墳は同規模かつ墳丘の方向を揃えている可能性があり、方墳という墳形の採用、一辺30m 級という決して小さいとはいえない墳丘規模など、石川流域の古墳の動向を考えるうえでの影響は少なくない。埋葬施設や築造時期を示す遺物が残されていなかったとはいえ、古墳を保存できなかったことは痛恨の極みである。調査については担当者の力量不足もあり、残されていた情報をすべて引き出せたかどうか心許ないが、被葬者や古墳づくりに携わった人々に対する供養という意味でも、今後は得られた成果の活用に努めていきたい。

最後に、さまざまな困難と闘いながら現地調査に取り組んでくださった調査関係者の方々の熱意のおかげで、調査を遂行できたことを記し、あらためて心より感謝の意を表したい。

参考文献

堅田　直1993『古墳』（『グラフィティ・日本謎事典』３）光文社

堅田　直2003『大阪・柏原玉手山丘陵立柱祭祀遺跡等』堅田考古学研究所

富田林市教育委員会1984『中野遺跡発掘調査概要』Ⅴ（『富田林市埋蔵文化財調査報告』10）

富田林市教育委員会1985『中野遺跡・宮林古墳発掘調査概要』(『富田林市埋蔵文化財調査報告』13)

富田林市教育委員会1987『小金平古墳現地説明会資料』

富田林市教育委員会2019『平成30年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書』(『富田林文化財調査報告』65)

写真５　小金平古墳群遠景（東から、1987年撮影）

報　告　書　抄　録

ふりがな	れいわがんねんどとんだばやししないいせきぐんはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	令和元年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書
シリーズ名	富田林市文化財調査報告
シリーズ番号	67
編著者名	角南辰馬（編）　林 正樹　渡邉晴香　西村雅美
編集機関	富田林市教育委員会
所在地	〒584-8511　大阪府富田林市常盤町1番1号　　TEL 0721-25-1000（代）
発行年月日	2020（令和2）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積（㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
きしいせき 喜志遺跡	とんだばやししきしちょうさんちょうめ 富田林市喜志町三丁目	27214	1	34°31′31″	135°36′36″	20181015～20181024	100	記録保存調査（個人住宅）
なかのきたいせき 中野北遺跡	とんだばやししなかのちょうにちょうめ 富田林市中野町二丁目	27214	15	34°30′50″	135°36′37″	20190314～20190324	33.3	記録保存調査（個人住宅）
くすのきだにこふん こがねひらこふんぐん 樟木谷古墳 小金平古墳群	とんだばやししみやまだい 富田林市美山台	27214	33-633	34°29′52″	135°35′4″	20190530～20190829	460	記録保存調査（個人住宅）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
喜志遺跡	集落跡	弥生時代、古墳時代	葺石状の礫群、溝状遺構	弥生土器、サヌカイト	
中野北遺跡	集落跡	近世、近代	ピット、土坑	陶磁器、瓦、硯	
樟木谷古墳 小金平古墳群	古墳	古墳時代	柱穴、落ち込み	須恵器	墳丘斜面において立柱遺構の可能性のある柱穴を確認。